

FD

Lecture Presentation Debate

FACULTY DEVELOPMENT

MUSASHINO UNIVERSITY 2017

REPORT

vol.3

FD 委員会の活動

目 的

武蔵野大学の教育理念の実現に向け、ファカルティー・ディベロップメント(FD)を積極的に推進し、学部学科及び大学院の教育方法を改善、向上することを目的としています。

FD 委員会

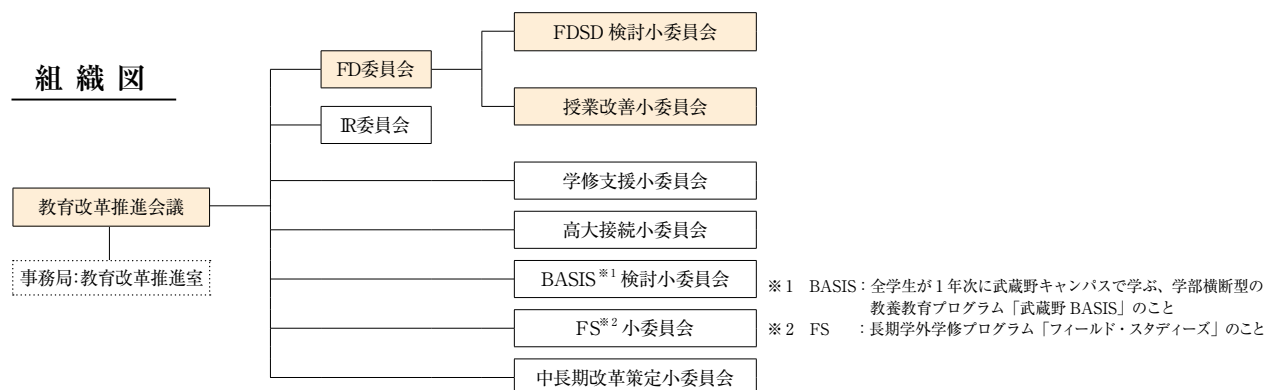
教育改革推進会議における審議事項 (FD 委員会関係)

平成 29 年 7 月 3 日	議題	平成 29 年度全学 FD 実施計画について
平成 29 年 10 月 23 日	議題	平成 30 年度 FD・SD 活動計画に向けて
平成 29 年 11 月 27 日	議題	平成 29 年度学部・学科 FD 活動推進について — FDSD 検討小委員会の立ち上げについて—
平成 30 年 1 月 29 日	議題	平成 29 年度目的別 FD 企画について

FD 委員会メンバー

委員長 西本 照真	学長	土屋 忍	キャリア開発部長	和賀 信之	学務課長
副委員長 池田 眞朗	副学長	小川桂一郎	教養教育部会部長	水野 正勝	武蔵野学務室長
北條 英勝	教務部長	落合 恒	大学事務部長	萩本 英樹	学部事務課長
渡部 博志	学生部長	飯塚 信	教育改革推進室長	井上 敏昭	武蔵野学部事務室長

組 織 図



Contents

FD 委員長 (学長) あいさつ	2	授業改善小委員会の活動	14
全学 FD 活動	3	学科 FD 活動	20
授業評価アンケート	9	平成 30 年度 FDSD 活動計画	23

平成 29 年度 武蔵野大学 FD レポート

本学における FD のあるべき姿が 定着するために

武蔵野大学学長・FD 委員会委員長 西本 照真



2008 年の大学設置基準における FD 義務化から 10 年。FD という言葉は、すっかり大学教育に定着しているかのようです。さらに、2017 年 4 月に改正（施行）された大学設置基準において、前年 3 月に公布された SD（スタッフ・ディベロップメント）に関する条文が追加されています。新設された条文は以下のように記載されています。

「大学は、当該大学の教育研究活動等の適切かつ効果的な運営を図るため、その職員に必要な知識及び技能を習得させ、並びにその能力及び資質を向上させるための研修^{※1}の機会を設けることその他必要な取組を行うものとする。」

※1 第 25 条の 3 に規定するものを除く。

ここで示す「職員」には、事務職員のほか、教授等の教員や学長等の大学執行部、技術職員等も含まれる^{※2}とされ、広義の大学教職員を指します。つまり SD の対象は、教員、事務職員に関わりなく、大学の構成員全体であるということです。また、SD の内容は、(FD 以外の) 大学の効果的な運営に関すること全般にわたるとことが示されています。翻って本学の FD および SD を活性化させ、教職員自身の自律的な改善に結びつけてこそ、定着するのだと考えます。

※2 「大学設置基準等の一部を改正する省令の公布について（通知）」の留意事項

さて、本学は、1924 年、世界的な仏教学者で文化勲章受章者でもある高楠順次郎博士によって、仏教精神にもとづいた浄土真宗本願寺派の宗門関係学校として、現在の中央区築地に設立されました。1950 年には、武蔵野女子短期大学を、15 年後には武蔵野女子大学を設立し発展の礎を築きました。さらに 2003 年に現大学名へ名称変更し、翌年の全学部男女共学化さらに薬学部設置を契機に、大学改革を推進してきました。2012 年にはこれまでの武蔵野キャンパスに加えて臨海副都心に有明新キャンパスを開設し、この有明を拠点にさまざまな改革が進行中です。

2018 年 4 月には、経済学部会計ガバナンス学科、教育学部こども発達学科の 2 学科、大学院では法学研究科ビジネス法務専攻（修士課程）、環境学研究科環境システム専攻（博士後期課程）を新設し、通信教育部では通信教育部人間社会研究科実践福祉学専攻（修士課程）が新設される等、9 学部 18 学科 11 大学院研究科、通信教育部、20 研究所・センターを擁する規模に至りました。この矢継ぎ早の発展に、学外から注目を少な

からず浴びているのも事実です。

近年の教育改革の歩みでは、2015 年に学修の質向上とギャップイヤー活用のために 4 学期制の一部導入、同時に 3 ポリシーの見直し（2010 年策定内容の見直し）、教育課程体系化のためのカリキュラムマップ導入を推進しました。

同年、文部科学省の大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅣ採択を受け、フィールド・スタディーズ（長期学外学修）の推進を本格的に開始しました。翌 2016 年には、手掛けてきた改革の検証機能を高めるべく、教育の質的評価のための全学授業評価アンケート（毎学期）、大学 IR コンソーシアム学生調査、本学オリジナルの全学学生生活実態調査もスタートさせています。

このように PDCA 回路の基盤構築を図り、対外的な説明責任を果たし、学内広報機能を高めるために、エビデンスを整備する取組を進めています。

こうした中、すでに先行して展開してきたいくつかの学科内 FD 活動はより安定化し、出口の実績に向けた質保証の手順が整備されています。一方で、授業の持続的改善を組織として支援する学科 FD 活動にはまだ改善の余地が残されているように考えます。

これからは、教育の成果を可視化させ、各学科の掲げた教育目標、さらに DP の達成、出口進路の活性化のために、現在の学科や教科グループにおける FD をより一層発展させねばなりません。

2020 年には、有明周辺でオリンピック、パラリンピックが開催されます。さらに、有明キャンパスに新たに校舎を準備し、看護学部等の移転とともに、新たな総合大学としての本学のステージを創造しなければなりません。

そのためにも、世界に最も近いグローバルな総合大学としての地歩を固めるとともに、全学の力を結集して教育改革、及び教育の質保証を目指す FD そして SD の実質化に取り組んでいきたいと考えています。

本学の FD・SD 活動に引き続きご理解と、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

全学FD活動

第1回 全学FD・SD研修会

日 時：平成 29 年 5 月 20 日（土） 11：30～12：15

講 師：筑波大学 金子 元久 特命教授
テーマ：社会の変化と大学教育の課題

20 世紀後半になって量的に拡大していった大学が、21 世紀になりどのような変化を遂げているのか。グローバル化、知識社会化、高等教育のユニバーサル化をはじめ、近年では産業構造の多様化も大学へ大きな影響を及ぼしている。その結果として、問われているのが大学の質である。質とは、教育内容が学生の一生にとって、どういう意味を持つのか。また大学は社会に対して、どう質の保証をしていくのかということである。

約 2 万 5 千人の大学生を対象にした学習時間調査の結果では、一日の活動時間がトータルで 8 時間。授業関連では 1 時間である。4 年次生も含めると、卒論と実験に充てられている時間は 2.9 時間、読書等が 0.8 時間。サークルが 0.9 時間、アルバイト 1.8 時間。これがいいたい平均的な日本の学生の姿である。

専門性の高い大学の方が学生は勉強するのではない、ウチの大学はあまり良い学生が来ない、勉強しない、と耳にするが、東京大学でも学習時間は決して高くはない。中国の学生の学習時間は日本よりはるかに高く、アメリカと日本の中間くらいだ。日本の学生は国際的にみてもかなり低いということが言える。

武蔵野大学のアンケート調査（平成 28 年）では授業の満足度はかなり高い。「とても満足」が 24%、「まあまあ」が 42%、「どちらとも言えない」が 24%。「満足」がおよそ 7 割で、かなり高い。しかし、「授業に対し内容を伝えることが出来る」ということについては、授業の理解は半分くらいだ。「授業を理解し内容を伝えることが出来る」という意味ではそれほど効果がでていない。では、学生の満足はどこから来ているのか。学習したから満足する、単位をもらったから満足であると学生は思っているならば、そこも一つの問題ではないかと思われる。

学生が授業に満足しているのか、自分の能力がどのくらいあるかという質問では、むしろ努力していない学生、学習理解が低い学生ほど自己評価が高い。自分が見えていない。大学はそれを是正する機能を持っているはずだが、十分に達成されていないところがあるのではない。学生の学習タイプは四通り。一つ目は、非常に高い目標を持っていて、大学の教育システムがそれと一致するタイプ。二つ目は、大学教育はどうでもいい、自分は自分でやっていけばいいというタイプ。三つ目は大学に期待しているタイプ。四つ目は大学には期待しないし、自分が何をやりたいのかもわからないタイプ。そうした様々なタイプの学生に大学が応えているかどうか。学習時間の問題は、専門の知識を獲得するだけではなくて、人格的成長にも関わりがあるのではないということである。そういう意味で日本の大学というのは非常に大きな問題を抱えていると言える。

また社会の変化が大学に与える影響だが、1990 年代のバブル崩壊以降、日本の経済は大きく変わった。重要なのは、サービス業が

大きく拡大しているということだ。大学生の卒業後の就職先の約 4 割がサービス業である。

15 年前の学生がもっていたキャリア観と今では大きく変化している中で、大学教育は同じ意識や経験知で果たして対応できるのか。そのためには教育改革が重要である。学生が卒業後に生きていく社会とどう関わっていくのか。そのために教育はどうあるべきか。15 年前と同じでいいわけがない。どのようにしてそれらに対応していくのかということは大学にとって大きな問題である。

大学教育は知識を獲得することを通じて人格的に成長していくことが求められる。そのためには達成目標が必要で、ただ授業に出ているだけでは学生が達するべき成長というものも無いだろう。私が何故学習時間に拘るかというと、学習時間を通じた学生自身の変容というものが、これからは非常に重要になってくるからだ。

では、どういった授業がいいのかということだが、いろいろな改革が行われている。一つは、出席重視。一つは議論に興味を持たせる授業。もう一つはグループワークとしての参加型授業、あるいは双方向型授業。参加型授業、双方向型の授業は非常に少ない。特に少ないのは「適切なコメントが付されて課題などの提出物が返却される」というものだ。

ではどういった授業が学習時間を伸ばすのに意味があるのかというと、「出席重視」や「小テスト・レポート」は学習時間にあまり影響はない。「理解しやすい工夫」とか「興味がわく工夫」というものもある程度影響はあるが、一番は「グループワーク」とか「授業中に意見を述べる」、それから「課題に対するコメント」である。これは自分一人でやるとか、したいことが良くわからない、と言っている学生に対しては非常にプラスになっている。



大学としては、どの教育プログラムに対して、学生がどのように反応するのかということや、それに対して何が教育の目標なのか、この目標に対する検証も重要だ。学術的な知識の習得、それから職業知識の習得、人格的な形成、そのどれもが重要だと思う。授業によっても違ってくるが、大学全体としても、この三つのうちどれを目的とするのか、それを実現していくためにどのように改革していくのか、具体的に考えていくことが必要になってくると思われる。

学習時間を獲得させ、そしてその結果、学生は学ぶことで最終的に何を實現するのか。これは大学が自ら考えていかなければならない。個々の授業で考えていくとともに、大学全体として考える。これからは大学の個性を作っていくこと、それが社会から大学が選ばれる条件になるのではない。

第2回 全学FD・SD研修会

日時：平成29年9月26日(火) 16:20～17:50

講師：共愛学園前橋国際大学 大森 昭生 学長
テーマ：地学・教職・学職一体の大学改革～誰のため／
何のための大学かを覚悟すること～

『地学・教職・学職一体の大学改革』とは、地域と大学の「地学」、教員と職員の「教職」、学生と教職員の「学職」が一体となって大学を作ることだ。我々は大学が潰れかけた経験から生まれた教育改革、その成果の可視化、そしてそのための覚悟をもって、学生と向き合い、大学運営に取り組んできた。群馬県は9000人が進学し、6000人が県外流出。残り3000人を国立大学を含む22大学で奪い合っているという激戦区だが、その中で本学が取り組んできた施策に対して様々な評価をいただいていた。ビジネス雑誌をはじめ多くのメディアにも取り上げられ、今は全国の大学からの視察も増えている状況だ。

まず誰のための大学で何のための大学かという、本学は完全に学生のための大学。何のためかというと、地域のための大学である。世界のためでも日本のためでもない、群馬のための大学だという覚悟。だから全国から学生は来なくてもいい。その覚悟をもって、どんな教育改革が必要だったかをご説明したい。

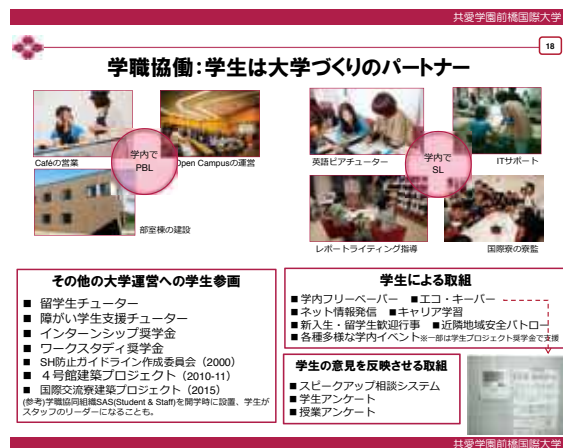
学校法人共愛学園は、平成30年に130周年を迎え、学園の中には、子ども園から小・中・高・大を持つ群馬県では唯一の総合学園である。国際的視野を持ちながら地域の課題を解決できる人材育成を目指して、意気揚々と全国初の国際社会学部を作った。初年度だけは定員充足したが、翌年は250人の定員に対して160人しか学生が入学しないという定員割れが起こり、その後も低迷が続く状況になっていった。その時に色々なカンフル剤を打ち、同時に文化づくりへの取り組みを始めた。

当時の学生へのアンケートでは「入学して力がついたと思う」と答えた学生は3割くらい。力がつかない大学だから入るわけがないという状況だった。しかし質保証への取り組みを強め、「入学して力がついた」と答える学生が増えるにつれて、受験生も増えてきた。大学経営というのは簡単な話だ。学生は何を求めて大学に入るかという、力をつけるために入ってくるのであって、それを提供できない大学に、誰も入ってくれるわけがない。学生自身が力がつくと思える大学になることが、結果学生募集に繋がった。

具体的に何をやったか。一つは、5つのコースの導入。高校生にわかるように「英語コース」など教育の中身を明確にした名称をつけた。同時に英検2級を持っていたら4年間の授業料は無料というカンフル剤。それで入学してくれた学生が、卒業後に群馬県の英語の教員採用試験に一発合格、もう一人は全日空に就職。その全日空に内定を貰った学生がオープンキャンパスでアテンションブリーズ！と話してくれた。10年経ったが、受験生は増え続けている。10年頑張れば一つのブランドになるのかなと思っている。

さらに入試レベルの維持。定員割れしているのに不合格を出し続けた。しかも推薦入試の評定も3.5という基準をずっと今まで維持している。当時、我々の教育力はそんなに高くなかったが、適当に単

位を出して適当に地域に送り出すと、もう地域からの信頼は得られなくなって、その後は学生が来なくなる。だから成績管理は厳密にした。定員が割れ、収入が減ったら給料をカットする規定をみんなで協議して策定もした。学生も大学づくりのパートナーとして学職協同に積極的に取り組んだ。「私の大学」という感覚を持ち始め、文化が根付きつつあった。教育改革というカンフル剤だけでなく、教職員が一緒になって大学を創っていくという持続可能な文化づくりも、両輪としてやってきたつもりだ。



高大接続では、高大産連携に取り組んだ。地域人材育成がテーマであり、高大の7年間でどういう力をつけたら地域で活躍できるのかを考えようと、高校の進路指導教員、我々教職員と、企業の採用担当の方とが一堂に会してディスカッションを重ねてきた。高大接続だけではなく、社会も巻き込んでいくということ。現在、モデルプランを策定中だ。

こうして地域の皆さんと一緒に育ててもらっている学生たちが、どういう力をつけたのかを可視化していくことが求められている。まだまだ道半ばではあるが、一例として一人ひとりの学習成果を可視化する「共愛キャリアゲート」に取り組んだ。ウェブ上で蓄積するポートフォリオで、アルバイトやボランティア、海外研修、授業など、4年間の全てをここに蓄積していくようにした。それをエビデンスにして本学が定めているディプロマポリシーと地域人材要件を基にして作った「共愛12の力」という学習成果指標に当てる。年度ごとにその力がどこまでついたかを自己評価する。学生にとって大変な労力であり、精度を高めるためには当然、教員も汗をかいている。

本学のキャリアゲートは、そこで成果を可視化して終わりではなく、次に「ショーケース」という仕組みを加えた。企業に提出するエントリーシートや履歴書に、URLやQRコードなどを付けて、「私を知りたかったらここを見てください」という方法。ショーケースまで付けてキャリアに結びつける学習成果の可視化ということに取り組んで、まだ3年程度なので、これからだと思っている。

学生たちは教育を受けに大学に来ている。当然ながら我々は高等教育機関であるという覚悟。数年前に教職員で、この5年間で、本学はどういう大学を目指すのかを議論した。その時に「学びの共愛」と言われる大学になろうと。これまでいろいろなことをやってきたが、学生は大学に学びに来るのだから、当たり前のことだった。そうした覚悟がこれからの大学には必要である。

第3回 全学FD・SD研修会

日 時：平成 29 年 12 月 22 日（金） 16：20～17：55

講 師：早稲田大学 教育・総合科学学術院 吉田 文 教授
テーマ：教育の質保証の時代：FD と学修成果

日本の教育改革は 1990 年くらいを嚆矢としている。高等教育計画というのは 1975 年くらいから始まったが、文部省の認可行政の中で大学は動かされていた。ただ、定員管理、量的な規制はされてはいるが、質的な管理はほとんどなされていないに等しかった。当時の大学進学率は約 3 割で、大学に行ったら生徒ではなくて学生になるのだ、学生は一人で学ぶのだ、だから放っておいてもいいのだ、というのが当時の主張だった。

それが 1991 年の大学審議会で「大学教育の改定について」という答申が出され、一つは、大学設置基準など諸基準の大綱の簡素化、もう一つが高等教育に評価システムを導入することの二つがセットになった。規制緩和はするが、評価もする、という仕組みがこの時代から始まった。設置基準の大綱化がなされると、点検、評価が一層必要になり、「質の向上」ということが、90 年以降の大学改革のキーワードになっていく。そしてこの時に自己点検が始まったが、これは努力せよということであった。

臨時教育審議会（以下、臨教審）というのは、中曽根政権の時代におかれた審議会である。政権そのものが、規制緩和路線に走っていて、教育も規制緩和に進んだ。もう一つは、先ほどの高等教育計画の終焉という問題だ。ここで大きな人口動態の変化があった。第二次ベビーブーマーが大学にやって来る時代と重なった。結局、文部科学省としては恒常定員と臨時定員、2つの定員を設けて収容力を高めた。その後の人口減少の中で、結局何が起きたかというところ、臨時定員のうち二分の一までは恒常定員にしてよいということの取り決めがなされ、日本の大学は収容力が一気に拡大した。

その後、大学進学率の急増がまた始まり、その時のキーワードが「教育の質保証」。進学率が一挙に増大すれば、学生の多様化が進むことは目に見えている。その中で教育の質保証が求められるのは、非常に自然なことだが、基準でもって縛ることができない。そこで、誘導して質保証をもたらしというのが当時の政策だったということだ。

そこで登場するのがファカルティ・ディベロップメント（以下、FD）。それ以降次々と、矢継ぎ早な政策が打ち出されていく。FDの話は臨教審の中では、大学の自己評価の一環として教員の資質の開発向上、FDに努める、とすでに書かれていた。それが 1991 年の答申の中で、教員の教授内容、方法の改善向上への取り組みを FD として、授業計画、シラバスの作成、公表、充実した開発的なカリキュラムガイダンスなどを積極的に推進する必要がある、ということで、この答申の中ではいわゆる教育についての改革の話がたくさん出てくるようになる。1997 年になると、新しい答申によって、個人から組織として FD をやるべきだという話になる。個々の教員レベルだけでなく、それぞれの大学は、理念・目標、教育内容・方法についての組織的な研究・研修を推進することが必要であるとされた。



FDが一段落すると、次はスタッフ・ディベロップメント（以下、SD）。大学経営を巡る課題が高度化、複雑化する中、職員の職能開発、SDが、ますます重要になってきた。大学を構成する教員と職員、そのどちらもが、それぞれの職能を開発していくべきという流れは 90 年代から始まり、FDの方は 2008 年、そして SDの方は 2016 年に義務化され、すべての大学の課題となった。

そうこうしているうちに、話は教員の問題ではなくて、学生の問題だとされていく。今、問題になっている学修成果だ。教員が提供する教育の問題を論じていた時代から、学習がどう行われるかという、学生の観点に視点が移っていった。この質的転換答申では、学生の主体的学習が言われ、主体的な学習をした成果として、学修成果を評価すべきだという話が出てきた。何を教えるかよりも、何ができるようになるか、ということで FD から学修成果への転換が成されていく。ここで言われたのが、今、どこの大学でも課題になっているアクティブラーニング。学生が主体的に問題を発見し、解を見出していく能動的な学習という、アクティブラーニングが求められている。

さらに総学習時間の確保。アメリカの学生と日本の学生の調査データを比較すると、日本の学生は、授業には出るようになったが、前後の学習時間が非常に少ない。いまの流行り言葉で、シラバスの充実、教学マネジメントの確立、ということも言われていく。そして学修成果の可視化というのが次になる。これまでも大学の中での学習の成果は可視化されていた。GPA もそう。あるいは卒業研究、卒業論文は、一番総合的な学習で、学修成果が可視化されているものであると言ってもいいかもしれない。しかし、それだけではだめで、外に見えるものにせよというのが文部科学省の政策であり、世界の傾向だ。

これも世界的傾向だが、コンピテンシーとかジェネリックスキルとかトランスファブルスキルと言われるような、特定の学問知識だけではなくて、それらをブリッジするような能力が重視されるようになっていく。一番の課題はどうやって測定するのかということ。能力はどうやって測定したらいいのか。それで最近言われているのはエビデンスだが、言葉が独り歩きしている気がする。

最後になるが、ここ 10 年から 20 年、日本の大学の教育改革というのは、大学が独自にやったものかということ、必ずしもそうではない。私としては大学として自主性を持たない限り、本当の意味での教育改革はできないし、学生の評価もできないだろうと思う。それについては明確な解があるわけではなく、大学の中でそれぞれが自律的に考えなくてはならないだろうということを強くお伝えしたい。

第4回 全学FD・SD研修会

日 時：平成30年3月20日（火） 13:00～14:35

講 師：社会福祉学科 小松 美智子 教授

テーマ：武蔵野女子学院高校1年生×社会福祉学科3年生
高大連携授業について

社会福祉学科の使命は、人間尊重の理念を基盤に、社会正義や多文化共生社会の実現を目指し、社会福祉固有の専門的価値及び倫理、知識、技能を有する存在として、人々やさまざまな構造に働きかける人材を育成することにある。こうしたなか、社会福祉学科では、今年度の新たな取り組みとして、併設校の武蔵野女子学院高等学校との間で高大連携共同授業を行った。この取り組みは、学科の3年生が高校1年生に対して、各ゼミ別にテーマを決めて授業を行ったものである。以下、小松ゼミの取り組みについて報告する。

小松ゼミでは、「病院にソーシャルワーカーがいるのはなぜ？」をテーマに、ワークショップ形式で議論した。はじめに冬休みの事前課題として、両親や祖父母に入院が必要な病気になったら心配になることをインタビューし、結果をワークシートに準備させた。授業当日は、このワークシートをもとに、病気になって心配になること、またその際にどんな支援があったら安心だと感じるのか、についてそれぞれグループで話し合い、それにより医療現場で活躍するソーシャルワーカーの役割についての理解を深めた。さらに、このような生活課題の解決に向けて取り組むソーシャルワーカーが活躍する幅広い分野を大学生がレクチャーし、社会福祉の分野の理解を深めた。また、信頼関係を形成するコミュニケーションについても体験するプログラムを実施した。

授業に参加した学生からは、高校生が楽しそうに授業に参加してくれてうれしかったこと、社会福祉を言葉にして伝えていくことの難しさをあらためて感じたこと、発展ゼミでクラスの仲間を相手に授業をしたことが活かされたこと、などの意見が出された。また高校生からは、実際に体験することで高齢者や介護される人の気持ち、また介護する側の人の気持ちを理解できたこと、意見のぶつかりを通して人それぞれの価値観があることがわかったこと、などの意見が出てお



り、一定の成果を得られたものと思う。

高大連携授業の取り組みは、高校生にとって大学という場で身近な大学生によって大学の講義の一場面を体感することを通して、自分の近い

将来を具体化していく機会となったと考えられる。また、大学生にとっては3年間で培ってきた自分たちの力を発揮することができ、自信につながる体験となったといえる。このように双方により体験として導いていくためには、準備を行っていくことが高校、大学双方において必要である。特に大学生が講義を行う主体となるためには動機づけとともに何をどのように高校生に分かりやすく伝えていくのかを学生間で話し合い、組み立て、実践してみるという時間が必要である。また継続的に実施するためには事務局体制の整備も欠かすことができないと考えている。

講 師：数理工学科 木下 修一 准教授

テーマ：数理工学科 FD について

数理工学科は、2015年の設置以来、数理工学の専門能力を身につけ、自然現象や社会現象をモデル化して理解し、システム設計に活用することができる人材や、大規模データから問題の本質を見抜くデータサイエンティストの育成に取り組んできた。設置当初より学科内の課題として、比較的若い教員や大学外の出身者が多く、教育力の強化が必要なこと、学生の出口を意識した教育が必要なこと、教員の研究分野や出身分野が幅広く、お互いに研究に関して交流が少ないこと、などが認識され、これらの問題点を解消すべく、これまで学科FDを行ってきた。今回は、2017年度に行った2回の学科FD活動について報告する。

「数理工学概論1」は、2年生に対して、数理工学の実例として、各専任教員が自身の研究をオムニバス形式で紹介する講義である。この講義は、学生に対して各教員の研究内容を伝えと同時に、3年次以降のゼミ情報や卒業研究の動機付けを与えることを目的としている。この講義に関して、今年度は、各教員が他の教員の講義を一度以上聞き、それをもとに2月14日の学科FD内で意見交換を行う、という取り組みを行った。学科FDでは、「教員によっては動画などの映像を効果的に用いたプレゼンを行っており、学生の興味を惹きつけるには非常に有効である」「学生に実験を行わせる体験型の講義もあり、学生の講義参加という面で非常に有効と思えた」といった意見が出された。こうした意見からもわかるように、教員が他の教員の講義を実際に聞くことは、自身の教育活動を振り返り、教育の質や内容を向上させる上で非常に役に立つことがうかがえた。

「数理工学概論2」は、3年生に対して、官公庁や自動車会社、保険会社、IT企業などの実社会で数理工学を駆使して活躍されている方々をゲストスピーカーとして招聘し、実体験に基づいた数理工学の有用性についてお話し頂くオムニバス形式の講義である。数理工学の実社会での最先端の応用を学ぶ機会は大変貴重であり、学生のみならず教員にとっても良い機会であることから、全教員が必ず一回以上出席し、7月3日の学科FDで意見交換を行う、という取り組みを行った。学科FDでは、「企業での業務に直接関係ありそうな内容を学びたいという要望が多く見られた」「学生から見るとハイレベルすぎるキャリアの講師であるため、自分のキャリアとのつながりがイメージしにくいのではないか」といった意見が出された。こうした意見を参考に、今後の講義のあり方について検討していきたい。

来年度に設置後4年目を迎える数理工学科は、前述の問題点に加えて次のような課題認識を持っている。

1. 数理工学科の認知を高めるための広報活動
2. 大学院を含めた6年一貫教育の実践
3. 卒業生とのコネクションの維持
4. アクティブラーニングを実践している「プロジェクト」科目の効果的な設計

こうした課題に対して、来年度以降も学科FDを有効に活用しながら課題解決をはかっていきたい。

平成29年度 全学 FD アンケート集計結果

第 1 回

講 師：筑波大学 金子 元久 特命教授
テーマ：社会の変化と大学教育の課題

研修内容に対するご自身の理解度をうかがいます。	
1. 理解できた	51.6%
2. まあ理解できた	46.1%
3. あまり理解できなかった	0.6%
4. 全く理解できなかった	0.0%
無回答	1.6%
合 計	100.0%

今回の講演「社会の変化と大学教育の課題」の内容について、すでにご存じでしたか。	
1. 以前からよく知っていた	6.8%
2. 知っていることと知らないことがあった	78.9%
3. あまり知らなかった	11.4%
4. 全く知らなかった	1.3%
無回答	1.6%
合 計	100.0%

現在の文部科学省の高等教育に関わる政策（高大接続改革、ガバナンス改革、グローバル化等）、大学改革に関する内容を積極的に情報入手するよう努めていますか。	
1. 常に入手している	5.2%
2. 気になる分野を入手している	51.3%
3. あまり入手していない	38.3%
4. 全く入手していない	2.9%
無回答	2.3%
合 計	100.0%

研修の内容に関する満足度をうかがいます。	
1. 非常に満足	35.7%
2. まあ満足	55.2%
3. やや不満	4.9%
4. 不満足	0.0%
無回答	4.2%
合 計	100.0%

第 2 回

講 師：共愛学園前橋国際大学 大森 昭生 学長
テーマ：地学・教職・学職一体の大学改革
～誰のため／何のための大学かを覚悟すること～

研修内容に対するご自身の理解度をうかがいます。	
1. 理解できた	63.4%
2. まあ理解できた	36.6%
3. あまり理解できなかった	0.0%
4. 全く理解できなかった	0.0%
無回答	0.0%
合 計	100.0%

今回の講演「地学・教職・学職一体の大学改革～誰のため／何のための大学かを覚悟すること～」の内容について、ご意見をお聞かせください。	
1. 十分共感できる	45.5%
2. 概ね共感できる	52.7%
3. あまり共感できない	1.8%
4. 全く共感できない	0.0%
無回答	0.0%
合 計	100.0%

現在、他大学における大学改革や教育改革、授業や学生支援改善など、先行する改革に関する情報を入手していますか。	
1. 常に入手している	10.7%
2. 気になる分野を入手している	49.1%
3. あまり入手していない	35.7%
4. 全く入手していない	4.5%
無回答	0.0%
合 計	100.0%

研修の内容に関する満足度をうかがいます。	
1. 非常に満足	38.4%
2. まあ満足	53.6%
3. やや不満	5.4%
4. 不満足	0.0%
無回答	2.7%
合 計	100.0%

第 3 回

講 師：早稲田大学 吉田 文 教授
テーマ：教育の質保証の時代：FDと学修成果

研修内容に対するご自身の理解度をうかがいます。	
1. 理解できた	42.2%
2. まあ理解できた	51.1%
3. あまり理解できなかった	4.4%
4. 全く理解できなかった	0.0%
無回答	2.2%
合 計	100.0%

今回の講演「教育の質保証の時代：FDと学修成果」の内容について、ご意見をお聞かせください。	
1. 十分共感できる	25.6%
2. 概ね共感できる	58.9%
3. あまり共感できない	10.0%
4. 全く共感できない	0.0%
無回答	5.6%
合 計	100.0%

現在、他大学における大学改革や教育改革、授業や学生支援改善など、先行する改革に関する情報を入手していますか。	
1. 常に入手している	5.6%
2. 気になる分野を入手している	55.6%
3. あまり入手していない	32.2%
4. 全く入手していない	2.2%
無回答	4.4%
合 計	100.0%

研修の内容に関する満足度をうかがいます。	
1. 非常に満足	24.4%
2. まあ満足	58.9%
3. やや不満	12.2%
4. 不満足	1.1%
無回答	3.3%
合 計	100.0%

※ 小数点第2位を四捨五入しているため、内訳と合計が一致しない場合がある。

自由記述（抜粋）

第1回

- ・学習時間をのばすためにどうするか、そのためには授業の工夫、コメント返し、参加型授業の実施等が有効であることを理解した。
- ・色々なデータを示して頂いて、相当に自身の思い込みや実際の効果・効率を伴わない努力、教育を行っていたということをおぼろげに思わされた。
- ・「授業評価が高い」授業が必ずしも「良い授業」ではない。学習意欲が低い学生にとっては「楽に単位が取れる授業」が「良い授業」となる。
- ・大学で学生に身に付けさせるべきこととして、知識、コンピテン、自己認識が重要であること。何より学習時間を増やすことが重要であること、これらの点を再確認した。
- ・武蔵野大学の学生と、一般的な大学生の平均との差がわかり、参考になった。
- ・授業評価アンケートを授業に活かすとともに、学生へのフィードバック、意識改革に繋げていくことが大切だと思った。
- ・世界（特にアメリカ）の大学生と比べたときの学習時間の少なさなど、日本の大学、大学生がかなり危機的な状況にあること。
- ・改めて数字として学生の自律的学習時間の短さがよく分かった。以前に比べ講義スタイルの授業ではなく、発表型、課題解決型の授業が増えているにもかかわらず、このような結果が出たのは意外だった。
- ・今後の大学教育には知識（専門知識）とコミュニケーション能力が必要になってくること。これを達成するには、「人格的成長」を促す学習が必要になってくること。

第2回

- ・大前提は「学生を育て地域に戻す」であることから、「出来ないことは出来る人をお願いする」という方針は素晴らしいと思った。もう少し規模の大きい大学では、これを参考に何が出来るのかを考えるよい機会になった。
- ・地域連携に対する取り組みが印象に残った。とくに、経営学科におけるエリア・マネジメントを考える上で参考になった。
- ・楽しくてラクよりも、大変だけど実力がつく大学という現代ニーズがある。地域の中核を担うグローバルリーダーを育てるという明確なビジョンがある。
- ・大学とは何かということをおぼろげに考えさせられた。
- ・卒業生の就職先企業からの大学教育の評価を教育改善に生かすという取り組みが新鮮だった。
- ・知識というよりも、協働の実例、教職員の覚悟を知った。焦点を絞ることの重要性。マーケティング戦略の重要性。
- ・教職員ひとりひとりの熱意と覚悟が（学生も含めて）大学という組織を、時代に合わせた確に動かすことができるということをおぼろげに学んだ。そこにはおのずと現状が把握でき、広い視野が持て、実践力を高める体制が構築できることが理解できた。
- ・地に足のついた大学のあり方について大変関心を持って聞かせていただいた。特に「地学」の連携については具体的で分かり

やすく大変勉強になった。

- ・学生中心主義の真の意味のうち、「学生にとって大切なことは大変なこともある」を明示することで、学生の支持を得られる点を新たに知った。また、小規模だからこそ動きがよいという利点があるという点に興味を持った。
- ・スタッフ会議を行って大学の方向性を決定していく。講師など若手教員の意見を聞くことで、挑戦的な運営を行って改革できるのだと思う。定員をうめる為の入試はやってはならない事であると共感した。
- ・多くの大学がグローバル化を目指す中、地域に強く根付きながら世界を目指す大学の存在と、教育内容の面白さ。

第3回

- ・学修成果の可視化の重要性和困難さを痛感した。学生の創造性と自主性を伸ばすことと、客観的な評価をどのように実現するかということ、現実の状況を見据えた上で具体的に考えていく必要があるだろう。
- ・1990年代以降の教育改革の流れ、特に文科省の政策の動向について、まとまった知見を得ることができた。背景を政策立案の現場に近いところからうかがえて、大変役立った。
- ・ルーブリックの課題とアメリカの示唆について大変参考になった。どのような言葉を使って評価に落とし込んだとしても評価しにくい（不可能な）項目が存在するということが理解できた。本質的な評価の仕方（日本の学生と背景に合ったもの）を考えないとならない。
- ・「そもそも」部分を丁寧に説明いただいたので、非常にためになった。様々な教育改革施策を実践している本学にこそ、このような「そもそも」論の議論が大変重要だと思う。
- ・アメリカでの経験に関する講演内容が興味深かった。ただ、教育の質向上の具体的な事例が聞けなかったのは残念だ。
- ・FD導入の背景や必要性などを知ることができた。ルーブリック活用の限界や問題点などを知ることができた。
- ・教員が丸丸として動くことの難しさが指摘されたが、学科内の意見がバラバラで効率的かつ体系的なカリキュラム構成にすら着手できないのが現状である。異なる意見をまとめていくリーダーシップを執る人材が必要。
- ・一律的な方法での評価が強化されて大学が外部の影響で自由度を失うようであると、似たり寄ったりの団体が増えていくように思う。自分の組織を自己評価し、外部からも判断されることは重要だが、内部と外部のバランスを持った教育研究環境を持ち合わせていたい。
- ・政府・産業界はEvaluation（評価）重視であり、容易に分かる標準テストのような形式を好む。対して大学はAssessment（診断）重視であり、ルーブリック形式のような多様性をふまえた教育の動向にある。
- ・FDが求められる背景やどのような政策が取り入れられてきたかを理解することができた。今後もFD・SDに対する意識を高めて業務に取り組みたい。

授業評価アンケート

目 的

- ・学科（学部）における FD 活動の推進
- ・全授業科目の体系性・適応度を検証し、教育改善の速度を高める
- ・本学の掲げる DP（ディプロマ・ポリシー）と科目における教育目標との整合の検証機能を高める
- ・全学的傾向の把握と教育プロセスのモニタリング機能を高める

実施概要

「授業評価アンケート」は、無記名式の質問用紙（マークシート）によるアンケート方式にて、各授業において履修学生に対し実施する。また、学生による授業評価アンケートの集計結果は、担当教員にフィードバックし、その結果を踏まえて所見を記入する「教員総括アンケート」も合わせて実施する。

対 象

学科：全学部・全学科

科目：ゼミ・実習・体育実技、15 名以下の少人数授業を除く（※）全科目

※学科からの要望等により実施の場合あり

実施方法

授業評価アンケート：実施期間の授業時間内で配布・実施・回収（所要時間約 20 分）

教員総括アンケート：学生による授業評価アンケート集計結果を踏まえ、実施期間に所見を記入・提出（3・4 学期のみ WEB 入力）

設問構成

A 共通設問	B 科目別設問	C 学科別（科目区分別）設問	D 自由記述
--------	---------	----------------	--------

設問項目

A 共通設問

◆履修目的とシラバスの機能について

- （1）あなたは受講前にこの授業のシラバスを読みましたか。
設問（1）で「1」（すべてしっかり読んだ）～「4」（一部分のみ読んだ）と回答した方にのみ、お聞きします。
- （2）この授業のシラバスの授業概要、授業計画は参考になりましたか。
設問（1）で「1」（すべてしっかり読んだ）～「4」（一部分のみ読んだ）と回答した方にのみ、お聞きします。
- （3）この授業はシラバスにそって行われていましたか。

◆授業の内容について

- （4）この授業の難易度は、あなたにとってどうでしたか。
- （5）この授業の課題（宿題）の量は、あなたにとってどうでしたか。
- （6）この授業の到達目標を理解していましたか。
- （7）この授業の成績評価の方法（基準）を理解していましたか。

◆授業への態度・準備について

- （8）この授業全体を通じてあなたの出席率はどうでしたか。
- （9）あなたは、この授業に主体的に取り組みましたか。
- （10）あなたはこの授業に際し、予習・復習（課題・宿題含む）の時間を、1 週間あたり、平均どの程度かけていましたか。
- （11）あなたは、この授業の内容を理解できましたか。
- （12）あなたは、この授業に満足していますか。

B 科目別設問（※各科目における到達目標の達成度を測る）

◆ 授業で成長したこと

- (13) この授業の〈知識・専門性の到達目標〉について、達成できたと思いますか。
- (14) この授業の〈関心・態度・人格の到達目標〉について、達成できたと思いますか。
- (15) この授業の〈思考・判断の到達目標〉について、達成できたと思いますか。
- (16) この授業の〈実践的スキル・表現の到達目標〉について、達成できたと思いますか。

C 学科別(科目区分別)設問（※各学科・科目区分において独自に設定した設問について問う）

(17) ～ (21) は、予め各学科・科目区分において設問を設定しています。科目担当の先生から指示された設問に回答してください。

日本文学文化学科 - この授業を受けて日本語の「読む」「書く」「聞く」「話す」のいずれかの能力が身に付いたと思いますか。 - この授業であつかった主題の歴史的背景や周辺の事柄に興味を持つことができましたか。 - この授業を受けて自分なりに研究方法あるいは創作方法に対する理解が深まったと思いますか。	社会福祉学科 - あなたはこの授業を受講して、解き明かしたいと思えるような新たな問いを、自ら生み出すことができたと思いますか。 - あなたはこの授業を受講して、この領域での社会問題に関係する現場に自ら出かけてみたいと思いましたか。 - あなたはこの授業を受講して、他の科目との結びつきを自ら考察することができたと思いますか。
グローバルコミュニケーション学科 - 授業の進め方についてどう思いますか。 - 教科書についてどう思いますか。 - いずれも「変えてほしい」を選んだ場合には、(22) の自由記述欄にその理由を書いてください。	環境システム学科 - この授業から知的関心や知的刺激を与えられた。 - この授業を受けて以前より学ぶ意欲が高まった。 - この授業を受けて自分は成長した。 - 教員が提示する設問(20)について答えてください。※各科目にて独自設定 - 教員が提示する設問(21)について答えてください。※各科目にて独自設定
日本語コミュニケーション学科 - この授業の中で新たな発見がありましたか。 - この授業内容に関連する学びをさらに深めたいと思いましたか。 - この授業を受けて、自分の意見を述べたり、他者へ発信するスキルが高まりましたか。	数理工学科 - この授業の進度は、あなたにとって、どうでしたか。 - この授業を受けて、今後の学習や卒業後の活動とのつながりを意識できましたか。 - TA・SAのサポートはこの授業で役立ちましたか。
グローバルビジネス学科 - To what extent do textbooks and course materials (handouts) facilitate your understanding, and ability to communicate, in lessons? - To what extent does using English as the medium of instruction increase your ability to communicate in lessons? - To what extent does the diversity of classmates contribute to your skill in dealing with cross cultural situations?	建築デザイン学科 - この授業で得たことを、「設計製図」、「卒業設計・卒業論文」に活かすことができそうですか？或いは、次年度の履修計画に活かすことができそうですか？また、活かせると思う点、或いは活かせない理由を「(22) 自由記述」の欄に記載してください。 - この授業を通して自分が何パーセントくらいパワーアップできたと思いますか？また、どうパワーアップできたか、或いはパワーアップできなかった理由を「(22) 自由記述」の欄に記載してください。 - この授業の中で、「孫の代まで語り継ぎたい！」と思える専門分野（建築）に関する事柄（知的関心）をどれくらい学べましたか？また、その学べた項目を「(22) 自由記述」の欄に記載してください。
グローバル学部 - この授業を受けて、学習する言語に関する興味・関心が増えましたか。 - この授業を受けて、学習する言語に関する能力が向上しましたか。 - この授業を受けて、学習する言語をつかって将来社会で活躍したいと思うようになりましたか。	児童教育学科 - この授業は、保育者・教育者としての意欲・態度・構えを培うことにつながったと思う。 - この授業は、保育者・教育者として必要な知識・視点・考え方を広げ深めることにつながったと思う。 - この授業は、保育者・教育者としての振舞い方や実践力を培うことにつながったと思う。
法律学科 - この授業を受けて、法令・学説・判例等を調べて、問題の解決策を導き出す力が付きましたか。 - この授業を受けて、将来活かせる専門知識が身に付いたと思いますか。 - この授業を受けて、ルール等を創るために必要な知識が身に付いたと思いますか。 - この授業の、教室内の設備（マイク・PC）、学内LAN(MUSCAT)、データ・ベースなどのサポートは十分になされていましたか。	薬学科 - 講義内容は系統的でよく整理されていましたか。 - 教員の説明は理解しやすかったですか。 - 教科書、配布資料などの教材は、講義内容を理解するうえで適切でしたか。 - 板書やプレゼンテーションソフトウェアなどの使用は、講義内容を理解するうえで適切でしたか。 - 講義の進行速度は適切でしたか。
人間科学科 - 授業を受けて自分自身や他者を理解するための知識が深まりましたか。 - この講義に関連する学びを、さらに深めたいと思いましたか。 - この講義について、意欲的に学ぶことができましたか。 - 学科科目のうち、特にどの科目群に関心がありますか。	

看護学科	・この授業を受けて、看護学に関する知識が深まったり、看護に関する技術や態度が身についたと思いますか。 ・この授業を受けて、看護に関する課題を解決するための思考力、判断力が高まったと思いますか。 ・この授業を受けて、看護学への興味、関心は高まりましたか。
教養教育（建学科目）	・この授業を受けて学祖・高楠順次郎先生について理解を深めることができましたか。 ・この授業を受けて釈尊（ブッダ）の生涯について理解を深めることができましたか。 ・この授業を受けて仏教の思想や文化について理解を深めることができましたか。
教養教育（体育）	・この授業を受けて身体活動、スポーツの知識を得ることができましたか。 ・この授業を受けて健康状態、健康への知識を得ることができましたか。 ・この授業を受けて身体への自己理解はできましたか。
教養教育（英語）	・この授業を受けて、文法の仕組みを理解することができた。 ・この授業を受けて、使用できる英語の語彙が増えた。 ・この授業を受けて、TOEICなどの学習に積極的に取り組むようになった。
教養教育（外国語（英語以外））	・外国語の授業を受けて、文法の仕組みを理解することができましたか。 ・外国語の授業を受けて、学んだ言語を使用する国々の文化について関心を持つようになりましたか。 ・外国語の授業を受けて、外国語を使ってコミュニケーションをはかることの大事さや難しさを理解することができましたか。
教養教育（基礎セルフディベロップメント科目）	・一年間の授業をつうじて、「知」の世界が広がったと思いますか。 ・他の講義でも、教員が板書した内容を越えて、授業内容をしっかりとノートをとる（ノートテイキングする）習慣が身についた。 ・最後の6週間での「成果発表」は、その後の学習の役に立ちましたか。
教養教育（発展セルフディベロップメント科目）	・選択した学問テーマについて、教養としての「知」が深まりましたか。 ・授業中、しっかりとノートを取り、講義内容を十分に理解できましたか。 ・この学問テーマの受講後、これからの専門での学びに役に立つと思いますか。
教養教育（情報科目）	・この授業を受けて、役に立つ知識を得ることができましたか。 ・この授業を受けて、情報に対する基礎的な能力が向上しましたか。 ・この授業で学んだことを、今後活用することができますか。
教養教育（日本語リテラシー）	・この授業を通して、レポートを書く力がついたと思いますか。 ・この授業を通して、資料を参照しながら考える力がついたと思いますか。 ・この授業で学んだことを、今後活用することができますか。
教養教育（キャリア科目）	・自分の将来を考えるための基礎的知識が理解できましたか。 ・自分の将来の最適な選択肢を考える重要性を理解できましたか。 ・社会を知るために多角的なものの見方、情報収集力の重要性を理解できましたか。
教養教育（資格課程）	・この授業を受けて、自らが取得しようとする資格（教職・司書等）についての理解を深めることができましたか。 ・この授業を受けて、資格（教職・司書等）取得に向けた意欲が高まりましたか。 ・この授業を受けて、資格（教職・司書等）取得に向けて取り組むべきことが明確になりましたか。

※学科区分別設問を設定していない学科は含めない。

D 自由記述

(22) この授業に対し良かった点、改善すべき点、あなたの総合的な感想、その他の意見をお聞かせください。

実施期間

	授業評価アンケート	教員総括アンケート
1 学期	5 月 29 日（月）～ 6 月 9 日（金）	7 月 18 日（火）～ 7 月 28 日（金）
2 学期	7 月 17 日（月）～ 8 月 4 日（金）	9 月 22 日（金）～ 10 月 2 日（月）
3 学期	10 月 30 日（月）～ 11 月 17 日（金）	1 月 12 日（金）～ 1 月 22 日（月）
4 学期	1 月 10 日（水）～ 1 月 30 日（火）	3 月 14 日（水）～ 3 月 23 日（金）

実施状況

	授業評価アンケート						教員総括アンケート		
	対象 科目数	実施 科目数	実施率 (科目)	履修者数	回収者数	実施率 (履修者)	対象 科目数	実施 科目数	実施率
1 学期	185	181	97.8%	16,137	12,982	80.4%	181	108	59.7%
2 学期	722	694	96.1%	38,150	30,224	79.2%	694	466	67.1%
3 学期	190	180	94.7%	16,538	12,095	73.1%	180	117	65.0%
4 学期	937	887	94.7%	45,977	35,061	76.3%	887	※実施中	※実施中

授業評価アンケートを踏まえた 学科FDの推進について

目 的

- ・課題共有、改善策の可視化
- ・授業への学生の主体的参加（自律的学び、責任感）を促すための課題、ノウハウ、スキル共有
- ・授業運営における GP（Good Practice）を見つけ出し教育の質的向上を図る

実施概要

回答結果の全学的な活用に向けて、授業評価アンケートの結果（1・2学期）を基礎資料として学科FDを実施。各学科の課題に対する改善策などを検討する。

学科FD活用データ

- (1) 授業評価アンケート基礎集計（全体・学科別）
- (2) 授業評価アンケート結果サマリー（全体・学科別）
- (3) 授業評価アンケート設問別クロス集計（全体）
- (4) 授業評価アンケートから見える課題一覧（学科別）
- (5) 学科・科目別 各設問の平均ポイント一覧

実施期間

平成 29 年 12 月 19 日（火）～平成 30 年 1 月 19 日（金）

実施状況

平成 29 年度の授業評価アンケートについて、各設問のクロス集計を順位相関係数を用い集計し、得られた結果から、授業改善のポイントとなる項目をまとめ、全学に報告した。

《授業改善のポイント》

- 【1】 シラバスで学生が理解できるよう各項目を記述し、シラバスに基づいて授業を実施する。
- 【2】 授業の難易度は、多くの学生がやや「難しい」か「ちょうどよい」と感じるあたりに設定する。
- 【3】 授業において到達目標と成績評価の基準を明確に説明し、理解させる。
- 【4】 予復習を含んで学生の主体的な取り組み姿勢を引き出すよう、教授方法を工夫する。

《集計からみえる主な結果》

- 【1】 シラバスを読んでいるほど、シラバスが参考になっているほど、シラバスにそった授業であるほど、到達目標と成績基準の理解度、主体的取組、授業理解度、授業満足度が高くなる。到達目標と成績基準の理解度、授業の理解度が高くなる。
- 【2】 授業の難易度は宿題の量に相関し、授業理解度と負の相関を示している。
- 【3】 宿題の量は授業の難易度と予復習時間に相関している。
- 【4】 到達目標の理解度は成績基準理解度と強く相関し、主体的取組、予復習時間、授業理解度と授業満足度と相関している。
- 【5】 成績基準理解度は、到達目標理解度と強く相関し、主体的取組、授業理解度と授業満足度に影響している。
- 【6】 出席率は主体的取組と相関している。
- 【7】 主体的取組は授業理解度と授業満足度と強く相関し、到達目標や成績基準の理解度、出席率と相関している。
- 【8】 予復習時間は宿題量、到達目標理解度、主体的取組、授業理解度と相関している。
- 【9】 授業理解度と授業満足度は強い相関を示している。
- 【10】 授業理解度は知識・専門性をはじめ、各目標到達度と強い相関を示している。
- 【11】 授業満足度も各到達目標と強い相関を示している。
- 【12】 各到達目標は相互に相関している。また、到達目標理解度と相関する。
- 【13】 学年別にみると、ほとんどの変数間において、学年が上がるほど相関が高くなる傾向がある。（ただし 5・6 年は除く）

これらの結果を踏まえた上で、全学の平均と学科の平均を比較することから見える課題を学科ごとに抽出し、その課題について各学科において改善施策等を検討した。

結果についての総括・今後の展望（各学科の報告書より一部抜粋）

日本文学文化学科 科目ごとの受講生に「科目の到達目標」や「成績評価の方法」をよく理解させることによって、主体的に学習に取り組むことを強くうながし、予習復習の内容ややり方についても、具体的に指導していきたい。	環境システム学科 授業の「満足度」は、「内容理解度」「知的刺激が与えられたか（学科独自設問）」「学ぶ意欲が高まったか（学科独自設問）」と相関があることが分かった。「満足度」を高めるためには、学生が理解でき、知的刺激を与え、学ぶ意欲を高める授業をすることが大切である。また、「知的刺激」が与えられる授業は学生の「成長実感」も高いことが分かった。一方、「課題の量」や「予習・復習時間」は「成長実感」とあまり関係がないことが分かった。
グローバルコミュニケーション学科 特に大きな問題も見当たらず、今後もこのような評価が続くように授業改善に努めたい。学科独自の設問に対する評価をさらに高めることを目標にした。	数理工学科 シラバスを読んでいない学生が多いため、シラバスを読むように学生へ周知することが最優先課題である。大半の学生は講義内容を理解できているようであるが、一部理解できていない学生も居るので来年度から補習を検討する。
日本語コミュニケーション学科 この質問でアンケートを行う側が何を測り、改善しようとしているのかがわかりにくい。質問の意図することと回答理由が明確にはじめてどうアクションをとるかが決まる。	建築デザイン学科 予復習の時間の多さが、本学科の特徴と考えている。一方で、シラバス・到達目標・評価基準の理解、出席率・主体性について、数値の低さが明らかとなった。シラバスの改訂、カリキュラムマップの活用、到達目標・評価基準理解への工夫、また、卒業研究必修化、削減した科目復活などカリキュラムの充実、学生の活動スペース確保の検討を行いたい。
グローバルビジネス学科 すべての科目が All English で展開されているため、英語能力に乖離があり、語学を始め、学力の差があることに起因する課題については、学力レベルに応じた指導をするなどの改善策を検討したい。また、よりきめ細かい対応をするために国際学生と日本人学生を分けて集計してほしい。	児童教育学科 予習復習（課題・宿題含む）の中に、プリントやレポート以外にも、指導案についてグループワークを時間外にすることや、実技の練習をすること、試作や試演をしてワークショップの準備をすることなどについてもこの項目に含むことをアナウンスすべきかと考える。
法 律 学 科 スペシャリスト教育（法科大学院、宅建士、司法書士）を担う部分が大いことから、理解度を基準に内容を検討することは DP・CP に矛盾することになり、慎重な配慮が必要であると考え。	薬 学 科 クロス解析の結果は興味深い、その結果のまとめ全体を俯瞰すると、宿題の量→予習復習時間→主体的取り組み→出席率、授業理解度→授業満足度のラインが見えてくる。授業評価アンケートによる授業改善の最終目標が学生の理解度、満足度を高めることであるならば、ここで解析の基となった「宿題の量」のような、要因を見出すことが必要である。その意味では、薬学独自の設問はその改善につながる要因を捉えた設問であると考え。その学科別の設問に対しては相対的に高ポイントが得られている。授業の具体的な内容、資料、説明、進行に対しての学生の満足度はかなり高いことが分かった。
経 済 学 科 予習→講義（講義内で演習問題・小テストの実施）→復習のサイクルを確保するよう指導ができれば、出席率・主体的に取り組む意欲・講義内容の理解・満足度等々の多くの問題が解決すると思われる。	看 護 学 科 ① 個々の授業は学生の意欲に結びつく授業ができている。さらに学生が意欲的、主体的に授業に取り組むためには、学生が DP と各授業の到達目標を理解したうえで、個々の授業が DP や将来のキャリアとどのように結びつくのか、各授業の有機的なつながりを理解する必要がある。そのためにオリエンテーションプログラムの際にシラバスとは何かを説明したうえで、各授業の初日にシラバスの説明をきちんと行う ② 学生の主体性を引き出すために、レポートやレスポンスカードへのフィードバックを必ず行う。コミュニケーション能力を高めるためにグループワークをさらに取り入れる。しかし 120 名のクラスではその取り組みが難しい。今後の検討課題である。 ③ 学生の主体性を引き出すために、形成的評価を取り入れ、学生自身が自己成長を認識できる機会を作る。DP に向けて現在、自分がどの程度の達成度なのか、学生が理解できるように可視化していく。
経 営 学 科 経営学科の 2 つの構造的特徴 ①経営学をよく知らないまま入学する学生が多い、②開講科目数が少ないために苦手／興味の無い科目を履修せざるをえない学生が少なくない）が授業評価に強く影響している。教員として経営学の魅力や有益さを伝える努力はますますしていく必要があるが、少しでも志望時点でのギャップを減らすよう新設学科のみならず既存学科の広報活動にも力を注いで頂きたい。②に関しては、経営学科+会計ガバナンス学科の 2 学科体制へと拡充されることとなったので、2018 年度入学生以降は少しずつ改善できるものと期待している。 また、新経営学科体制では、出席管理や成績評価について一定の標準を設定することを予定している。教員個々の指導上の工夫不足についても、学科 FD を増やして相互に研鑽を重ねていく予定である。	教養教育部会 学生に対してシラバスを読むことを一層促すことにする。それでもシラバスを読まない学生が出現することが想定されるので、授業内に到達目標や成績評価に関する内容の周知の回数も増やすこととする。（外国語科目／教職科目／インターンシップ科目） 講義のガイダンス等でシラバスの内容を確認するとともに、シラバスに沿った授業の徹底を促していく。（セルフディベロップメント科目） シラバスを読む、読まないに関して、「学科独自の課題」があるとは思われない。シラバスを読む読まないに気を取られていると、もっと重要な教育上の課題を見落とす危険がある。（情報科目） 全体的に司書課程の授業に対する「意欲」の低下傾向が見られるので、意識して授業を進めたい。（司書科目）
人間科学科 授業に主体的に取り組めていない学生が一定数居り、そのことが到達目標の無理解や授業外学習の欠如の原因となっていると考える。授業冒頭において、当該科目を学ぶ理由について生活や社会問題と関連付けながら説明をおこない、学生の主体的学習を促すことが必要である。	
社会福祉学科 全体として、受講している学生と、科目の目標・内容・シラバス等を共有し、目標の達成に向けて共に取り組む関係づくりが求められていることが示された。現状としては、学生の授業外の学習の時間や負担を、必要以上の配慮により、低くなるように見積もっている状況がある可能性が考えられる。同時に開講されている科目が少なくなるという 4 学期制のメリットを最大限にいかし、学生の授業外学習の時間を最大限に確保できるよう、授業関連を高める必要がある。また、教員が課題を出題することに積極的ではない現状も明らかになった。ディプロマポリシーに基づき、講義、授業内のワーク、授業外の課題のデザインをしていく必要がある。	

授業改善小委員会の活動

北條 英勝	教務部長	飯塚 信	教育改革推進室長
渡部 博志	准教授（経営学科）	友田 暁子	学務課係長
積田 淳史	准教授（経営学科）	満島 正浩	教育改革推進室主査
城月 健太郎	准教授（人間科学科）	柚口 寛子	学部事務課員
加納 和子	准教授（経済学科）		
磯部 孝行	助教（環境システム学科）		

目 的 問題意識に基づく挑戦的な授業を設計・実践・評価し、経験を体系的に蓄積する。

活 動

第1回：平成29年5月24日（水）「前年度活動の振り返り、及び今年度の活動について」
 第2回：平成29年7月31日（月）「今年度1・2学期の授業改善トライアル実施計画について」
 第3回：平成29年8月23日（水）「授業改善トライアル応募案件（3・4学期分）の選定」
 第4回：平成29年11月15日（水）「次年度の小委員会の活動方針について」
 第5回：平成29年12月25日（月）「次年度の授業改善トライアル実施計画について」
 第6回：平成30年1月15日（月）「授業改善トライアル応募案件（平成30年度1・2学期分）の選定」

授業改善 トライアル

授業改善を全学的な取り組みとすべく、授業における意欲的な試み、特に既存の枠組みでは十分に実施できない手法を中心に、支援を必要とする授業改善の取り組みを選定する制度。

概 要

- ・授業改善に向けた取り組みであれば、その内容・手法を問わない。
- ・意欲的に新たな試みを行っていれば、取り組みの成否を問わない。
- ・学内外への事例発信を念頭に置き、授業改善トライアル参加教員同士で座談会を開いて情報共有する。
- ・1申請に対する支援額：上限10万円（受講生100名以上の授業）、5万円（受講生100名未満の授業）

平成29年度 授業改善トライアル選定事案一覧

教員名（敬称略）	対象科目	受講者数	対象学科・学年	対象学期
礪 殿武	中国研究（文化文学）初級	60名	グローバルビジネス学科2年	1・2学期、3・4学期
金尾 悠香	ゼミナール1・3、ゼミナール2・4	各10名	法律学科3・4年	1・2学期、3・4学期
三浦 裕子	日本の演劇（古典芸能）	60名	日本文学文化学科1年以上	1学期
積田 淳史	イノベーション・マネジメント入門	200名	経営学科2年	1学期
	イノベーション・マネジメント1	150名	経営学科3年	3学期
高田 幸江	成人看護論2A	125名	看護学科2年	4学期

トライアルに対する座談会

実施された授業改善トライアルの内容を今後学内で共有するため、参加教員同士で座談会を行った。

- ・平成30年2月7日（水） 礪殿武教授 / 三浦裕子教授
- ・平成30年2月14日（水） 高田幸江准教授 / 大井千鶴講師 / 山本摂子講師

文化を消費するのではなく、未来へつなぐために ～「授業改善トライアル」の工夫と実践



| グローバル学部 |
2年 千歳 瞳 さん

| グローバル学部 |
3年 菊野 圭佑 さん

| グローバル学部 |
3年 七海 光 さん

| グローバル学部 |
ラン ヒロタケ 先生
欒 殿武 教授

| 文学部 |
三浦 裕子 教授

| 文学部 |
3年 坪岡 郁見 さん

グローバル学部と文学部。どちらも言葉を学ぶという印象が強い学部ですが、グローバル学部であれば単に外国語を学ぶのではなく外国語で海外のことを学び、文学部は日本文学文化学科という名が示すとおり文学にとどまらず文化まで学んでいきます。2017年度の授業改善トライアルでは、グローバル学部の欒先生が「中国研究」、文学部の三浦先生が「日本の演劇」において、それぞれ文化を学ぶ授業で新たな試みをされました。受講した学生も交えて、文化を授業で学ぶことについて対談しました。

欒 私は「中国研究」を担当しています。初級・中級・上級があり、初級の受講生は2年生が中心で、主に中国の生活文化と生産文化を学ぶ授業です。私は初級を6年にわたり担当しています。

三浦 私は「日本の演劇」という授業で、主に古典芸能を教えています。学生が古典芸能に触れる機会は少ないですし、あまり興味もないかもしれないと思い、身近に感じてもらえるような授業を心がけました。2年目の今年は能「道成寺」を取り上げました。

七海 欒先生の授業は、中国語で中国の文化を教えるスタイルで、要点もパワーポイントにまとめられています。日本にいと分かったり、先生の話だけでも日本人には分かりづらい風習や習慣などについては動画を活用したり、現地で使われているモノは実物を見せてくれたり。とても分かりやすい授業です。



菊野 私は英語圏の文化と中国語圏の文化を学んでいます。英語圏には足を運んだことがあり、現地の雰囲気や生活習慣、言葉も肌で感じることができましたが、中国にはまだ行ったことがありません。それだけに、中国の茶器やシルクなどの実物を見て、触れられる欒先生の授業は、言葉だけではなくとても効果的というか、分かりやすく、楽しく学べるものでした。

坪岡 私は文学部に所属していますが、日本の古典芸能に触れたのは三浦先生の授業が初めてでした。文学を読んだり書いたりして勉強することが多かった中で、三浦先生の授業を通して古典芸能に更に興味を持ち、後に受講した舞や謡を行う演劇実践の授業をより楽しむことができました。「日本の演劇」では能の「道成寺」をテーマに学びました。私は人形アニメーションや歌舞伎、絵解きなど、いろんな芸能に表現された「道成寺」という物語を比較しました。とても楽しかったです。

三浦 「道成寺」は、女が蛇になって恋する男を追かけるという、一種のストーカーを描いた能です。『古事記』から現代演劇

まで、日本の文学と演劇のなかではずっとつながっているモチーフなんですね。授業ではこのモチーフを横軸として勉強しつつ、能楽師の方に実技を見せていただくなど、古典芸能の現場の方をゲストスピーカーにお招きし、そのお話を縦軸として体感してもらいました。学生は両軸とも興味をもって受け止めて下さり、嬉しく思いました。



欒 私の場合は、シルク、陶磁器、茶器という実物を使った授業を、4学期に行いました。3学期に言語、文字、中国思想といったことを学んだうえで、なぜ中国はかつて豊かだったのかを知ってもらうために、4学期で実物を使ったのです。



三浦 日本の古典芸能を学んでいると、中国から沢山の恩恵を受けていると感じることがよくあります。お茶もシルクも陶磁器も、すべてが中国から伝わってきたものですよね。欒先生の授業を受けたら、実物に触れつつ、日本の文化の根底に中国の文化の影響があることを自覚することができるのではないのでしょうか。素晴らしいことですね。



菊野 祖父母はお茶を飲むときに茶器を使っていますが、ルーツである中国のものとは少し違って、そこがとてもおもしろいと思いました。また、日本では急須でお茶を淹れてきましたが、ペットボトルのお茶が普及し、それが当たり前になっています。でも、海外ではペットボトルにお茶が入っていること自体が珍しい。そうした時代の変化もおもしろいですね。

欒 学生たちにどういうふうにお茶を飲んでいるのか質問すると、ほとんどが急須は使わず、ペットボトルという答えが返ってきます。独り暮らしの学生のほとんどは急須を持っていないくて、マグカップさえ持っていないという人もいます。コンビニでペットボトルのお茶を買ってきて飲んでいるんですね。中国ではどうか。冷めたお茶は基本的には飲んではいけないとされ、親からそう言われて育ちます。一晩おいたお茶は飲んではいけないとも教えられます。身体を壊すという古からの言い伝えがありますから。

千歳 私の家には急須がありますが、取っ手の部分とか中国の急須とは違いますね。海外から伝わったものは、もとの文化とは違うふうに伝わるというところがおもしろいと思いました。



三浦 急須などは中国から日本へと地理的な空間を渡った例ですが、芸能は時間的な隔たりのある空間を次の世代につないでいくものと言えます。

能「道成寺」を授業で教えた後、留学生が「陰陽師」というゲームを紹介してくれました。その登場人物の一人に清姫というキャラクターがいて、時々火を吹くのだそうです。じつは清姫は能「道成寺」の登場人物で、蛇に変身し火を吹いて鐘を焼き尽くしてしまいます。「ゲームの清姫が火を吹く理由がわかった」と学生が言っていました。

これは私にとっても勉強になりました。というのも、ゲームのキャラクターを造形するときに古典芸能をヒントにする例を見つけたからです。さらに、このようなことを意識しながらゲームをすれば、芸能や文化が次世代につながっていく可能性も見つけたように思います。



坪岡 私は「道成寺」を猟奇的な恋の話のように捉えるのは、ちょっとかわいそうかなと思いました。恋をすると清姫のような怖い姿になってしまうとか、自信がなくなるとか……そういうことも考えて女性目線で描いている作品なのかな、と。恋をして自分が醜い姿になってしまう、不安な思いで醜い姿に変身してしまうという意味で、ルドンが描いた「キュクロプス」という絵は似ていると思うんです。恋する思いが叶わないから殺してしまうというところが。

三浦 学生たちが、自分も芸能や文化をつないでいく一人なのだと自覚すると、学びがいろいろなことに結びついていくように思います。先ほどのゲームではないですが、

たとえば能や狂言を学ぶときに、台本を読むだけでなく、能楽師の方の実演や能面・扇といった道具を通して古典芸能を身近に感じることができれば、芸能や文化がその場で消費されるものではなく、体感から身につについていく学問・学習になっていくと思います。

欒 現代人の生活は合理化が進んでいますが、それでも、もうちょっと生活を楽しむということがあっていいと思うんですね。ペットボトルでお茶を飲んでもいいけれど、急須を使って優雅に飲むこともおもしろいですよ。

三浦 劇場で古典芸能などの演劇を実際に観るということは、ある意味、とても贅沢な時間を過ごすということだと思います。この授業がそのきっかけになればいいなと思いますね。



欒 授業ではお茶のことを学ぶ前に食文化を学ぶように設定しています。食事をしてお茶を飲むという順番ですね。食文化については、日本の料理ではとろ火が中心ですが、なぜ中華料理は強火なのかとか、まずはそこから考えてもらいます。

千歳 授業を受けてから見え方が変わった例でいえば、食事をするときに偉い人が座る場所が日本と違うとか、中国では一つの皿に盛られた料理を取り分けますが、日本では一人ひとりに料理が出てくるとか。当たり前のことだと思うから気にしないけど、中国の文化を学ぶことで、日本の文化との違いが見えてきて、その結果として日本の文化も改めて理解できるということがありました。

菊野 食文化を授業で学びましたが、シルクロードを通じて広まった小麦が国・地域によって違う料理になっているんですね。中国では餃子や小籠包、西洋に行くときピザ、中東ではナン……。小麦粉で作った生地で包んであるか、生地を開いて調理するかと

いうだけの違いですが、原料は一緒でも食としての形は全然違ってくる。文化によって変化するということが、とても興味深いなと思いました。

七海 私は昨年の夏休みに天津に2週間行ってきました。「中国研究」を受ける前になります。現地では毎日、中華料理を食べていたのですが、いつもお皿に油がすごく残るんですね。油が浮いているのを見て、私たちが太らせたいのかって……。帰国して欒先生の授業を受けて、あれは適当に油を入れているのではなく、料理を冷やさないためにちゃんと量を考えて使っていることが分かりました。



三浦 今の中華料理の例ではありませんが、自国の古典芸能に対して、日本の方は思い込みが激しいように思います。お爺ちゃんがやっているものだから、難しいとか、敷居が高いとか。古典芸能を含めた演劇は観客がいてはじめて成立するものです。また、厳しい目で見下さるお客様がいないと質が低下してしまう危険性があります。

学生にはまず、固定観念を払拭してもらいたいですね。そのうえで、古典芸能を未来につなげていくか否かを考えていく。つまり、自分たちの選択によって古典芸能の将来が決まる、そういう意識を持つてほしいと思います。

欒 文化を教える教員は、たぶん共通する悩みを持っていると思うんですね。文化とはいったい何だろう、何を教えればいいのかということ、実は私もずっと悩んでいます。

三浦 今後の希望としては、普通の授業では体験できないことをしたいですね。例えば、学生と一緒に能や狂言を観に行ったり、プロの能楽師の方から所作を学んだり。

欒 「中国研究」の初級では、中国の文化について広く考えてもらい、中国に興味を持ってもらうということを意図しました。例えば、学生のアルバイト先に中国からの観

光客が来店し、お冷を出したら誰も飲まず、お湯をくださいと言われたという話を聞きました。日本のお店はお湯をたくさん用意していないので、中国人の団体客が来るととても困るというのです。であれば、なぜ中国の人たちが冷やした水をあまり飲まないのか、食文化の背景も含めて理解してもらったほうがいいと思ったんです。そう思って授業をしたのですが、試験が近づくと学生たちから、こんなことを聞かれました——「何を覚えればいいのか」。学生たちは正解がほしいんですね。でも、これは私の考えとは違います。まずは感じて、そこから興味を持ったものをさらに自分で勉強し、本を読んだりしてほしい。文化は知識であっても、体験すること、自分の感じ方が大事だからです。

三浦 授業でアンケートをとったら、「嘘を言うてはいけない」など、モラルに基づいて作品を評価する回答が多く寄せられました。学生たちは小さい頃から、道徳的な価値基準をきっちり教え込まれてきたのだと思います。それはそれで素晴らしいことですが、文学や芸能はモラルでは律しきれない人間の弱さなどを描くことがあります。モラルから外れてしまうから人間はモラルを求める。そのように矛盾に満ちた人間性を学んで視野を広げるのが、大学の授業かと思っています。そういう意味で能「道成寺」は適当な題材だと思いました。

欒 よく分からないものの一つが文化でもあるように思います。「何でこうなんですか」と問われると、「だってこうだから」と答えてしまいそうな部分って、文化にはありますよね。「文化は知識ではなく体験」だと思うのは、体験をすることによって深まった知識が得られていくという意味です。体験が最初にないと知識を深めていこうという動機も生まれません。知識を深められるようになれば、その知識を人に伝えていくことにつながっていく。それこそ古典芸能の場合には、その体験があって知識をつけるからこそ、「やっぱりこれは遺そう」という判断ができ、続いていくのだと思います。

坪岡 受講した後、能・狂言を見に行く機会をつくることができました。これは、私にとって最も嬉しい事です。今後もし仕事や生活の中で古典芸能を含めた芸術や文化に関わっていけたらいいなと思います。

七海 中国語は勉強してきたけれど、中国の人や文化にはあまり触れたことがなかったのですが、授業を通してより一層中国が好きになりました。茶器だったらお茶が冷めないように急須にお湯をかけて温かいものを出すとか、料理だったら油は大量に使うけど、みんなに温かいものを食べてもらうとか。中国人の思いを文化を通して学ぶことができ、中国人が経験と知恵によって多くのことを考えていると学べたのは、とても良い経験でした。

菊野 高校で能や狂言、落語を見る機会があったときは深く感じる事がなかったことが、半月前に浅草に落語を見に行ったら古典芸能に対する見方が変わりました。まさに文化を学ぶことの意味なのだと三浦先生のお話をうかがって分かりました。テレビなどの映像で観る落語とは違うんですね。生の落語は、お客さんとの掛け合いがあるなど、お客さんがいて成り立つものです。そのような場を経験したからこそ、これからは落語だけではなく古典芸能という文化に触れていくことを大切にしていきたいです。

千歳 授業もそうかもしれませんが。中国語を学ぶときに、どうしても先生の話聞いてノートをとるだけになりがちです。それが欒先生の授業では、「なぜこういう文化なのか」ということをまず問いかけて、一緒に考えて学んでいきます。問いが立てられているから引き込まれ、懸命に考えるからやがて身についていく。ただ机に向かって勉強するだけでは身に付かないことを学ぶことができました。





「知識」「技術」「態度」が一体の看護のあり方を伝える ～看護学科「成人看護論 2A」におけるトライアル

担当教員：高田 幸江 准教授、諸田 直実 教授、三次 真理 准教授、大井 千鶴 講師、山本 摂子 講師、三觜 久美子 実習助手（看護学科）

インタビュアー：渡部 博志 准教授（授業改善小委員会委員／経営学科）

渡部 本日は看護学科の「成人看護論 2A」の科目を担当された高田先生、大井先生、山本先生にお越しいただき、授業における新たな試みについてお話をうかがいます。まず、高田先生に今回の試みの概要をうかがいたいと思います。

高田 私は今年度武蔵野大学に着任し、「成人看護論 2A」の担当となりました。前年度のシラバスでは、「災害看護」の単元が最後にあって、それだけ独立したようになっていると感じました。急性期看護にはいくつかのまとまりがあり、生命の危機的状況にある人の看護や、手術を受ける患者さんの看護などがあります。周手術期の看護を例にとると、手術によって患者さんの身体の機能や構造が変わります。看護では、患者さんの身体の変化に対する支援だけではなく、患者さんが手術後の体の変化をどのように受け入れていくのか、さらには生活や役割を再構築していくことなど、患者さんの心理・社会面も含めて、支えています。そのような看護のまとまりや流れが反映されるよう、今年は順序性と連続性を考えた単元配置を試みました。

渡部 単元毎に完結していた授業を連続させるというか、連携を強めることに取組まれたということですね。その際に何か工夫されたことはありますか。

高田 はい、その際に考えたのが、災害看護で行う「トリアージ^{*1}」の学び方です。講義形式の授業から演習形式に変えました。災害は平常時と異なる特殊な環境で、医療を行う資材も人材も非常に限られます。そうした状況下で重症度を判断し、治療の優先度を決定して選別する技法がトリアージです。

大井 昨年までは講義形式で、現場で経験を積んだゲストスピーカーを招いていました。災害時のトリアージは国家試験にも出題

されるので、講義に盛り込まれていたのです。今年は、先ほど高田先生が述べたように、学生が自分たちで話し合い、判断をしていくという演習形式です。それによってリアリティーをもって知識をつかめ、学生の理解のレベルが一段階上がったと思います。

高田 トリアージ演習では、例えば、瓦礫の中で筆筒の下敷きになっている方を想定し、脈拍数や呼吸状態を事例として学生に提示します。この事例の場合はトリアージ法ではどの色に該当するのかをグループで相談してもらい、実際にトリアージタグを切るという一連の判定を実際に学生にやってもらいました。必修科目のため学生数が120人位になるため、20グループに分け、先輩である4年生のSAに、全学生が話し合いに参加できるように支援するよう、協力依頼しました。

渡部 トリアージの演習は講義形式の座学と違った学びになったと思うのですが、他にも学修の狙いがありましたか。

高田 この演習では、救命が難しい状態の被災者の方に黒のタグ^{*2}を付けることの影響や、医療者の思いと責任の重さを理解してもらいたいというねらいがありました。災害時には専門職は心理的にも辛い決断をしないといけない場面がある。だからこそ、このような事例を最後に取り上げました。学生のリアクションペーパーには、「被災者が非常に辛い状況にある中で、黒を付けることの重みと、医療者が判断していくことの責任を身に染みて学ぶことができた」という意見がかなり多くありました。ただ座って聞いている授業よりも、演習形式のシミュレーションの方が臨場感をもって学生たちに伝えることができたのではないかと感じました。

渡部 教科書で読んだ知識で、この場合は赤とか、こういう状態のときは緑と判断して

いたのが、より臨場感が増したということですね。黒のトリアージタグをつけるという辛い判断をすることも、リアリティーに繋がるわけですね。

大井 今年の授業の中で、ゲストスピーカーの方が、ある殺傷事件のことを事例に、ご家族など関係者のプライバシーに配慮しながら具体的な話をしてくださいました。リアクションペーパーにもその話が一番書かれていました。そういう場面でのジャッジがどういうことなのかは、学生の中に入っていたと思います。

渡部 看護師となって社会に出ていったときに、いつ直面するか分からない、でも逃げられないという状況。職業として正面から取り組まないといけないという現実を、直接お話を聞くことによってリアリティーをもって感じられたのでしょうか。

大井 一般に災害看護と聞いてまず思い浮かべるのは、地震の場面だと思います。でも、そうした自然災害も、テロなどの人災もすべて含まれる。そういうことも講義で伝えてくださったことで、災害看護を実践する範囲が学生の中で広がった。その現場でジャッジメントをしていくときには、ケアする側にもなるけれど、ケアされる側にもなる可能性もある。どちらの立場にもなるという重みを実感してもらえたのではないのでしょうか。

渡部 教科書を読むだけでは全く異なる意識の入り方をしていくということですね。

山本 本学の学生たちは「生老病死に寄り添う」という理念のもとに教育を受けてきているので、災害などのシビアな状況で判断しなければならないということへの感度が高いと感じます。その意味で今年の災害看護の授業は、学生の特性に合った入り方ができたと思います。SAとして演習をサポートした4年生は、自分たちもとても勉強になっ

※1：大事故や災害などで同時に多数の患者が出た際に、手当ての緊急度に従って優先順をつけること。傷病者には緊急度合いに応じたトリアージタグがつけられる。トリアージタグは、本ページ上段の写真参照。

※2：死亡群：生命徴候が無く救命不可能であることを示す。

たと言っていました。2年前に自分たちも同じ授業を受けているけど、内容が違うと。

渡部 その他の単元で工夫されたことはありますか。

高田 災害の場合も救命の場合も患者さんの状態を判断していきますが、平時と災害時では対応が異なります。平常時の生活の場で急変が起きたら、まずは普通救命を行います。今年は消防庁主催の普通救命講習を取り入れました。より実践的な技術を学ぶ場となり、これを修了すると3年間有効の認定証が交付されます。

渡部 山本先生や大井先生は、昨年の普通救命の授業との違いで感じられたことはありますか。

山本 講習の目的や教える技術はどちらも同じですが、昨年は今年の半分の時間で、演習室を使って120人が一斉に受ける演習形式でした。今年は時間が倍だということ、さらに資格が取れるという意味では、学生の自覚が違うなと感じます。学生たちは証書をよりどころに、それを3年後に更新することになるので、より主体的になるのではないかと思います。

大井 時間が倍ということに加え、教える側の数も多くなりました。それによって、学生1人当たりの技術習得が均等になり、救命のプロセスが身についていく。また、普通救命講習を、運転免許を取るときに受けた、高校の体育で学んだといった経験のある学生がいる一方、何の経験もない学生もいます。このように学生の事前の経験にばらつきがあるため、最低限こまでは身につけようというレベルになりがちだったのですが、今回は一定のレベルのところまで持っていくことができました。心臓マッサージのリズムなども、繰り返し実践することで一定の技術が身についたというところがあります。

渡部 より技術が定着するようになったということですね。

大井 目に見える形で。そのうえ証書も交付されるので、誇りを持つことにもつながっています。

渡部 それは重要なことだと思います。証書を取ることが自信や自己肯定感を高め、次の学習につながっていく。その意味で、この普通救命講習が2年生の段階であるのはすごくいいことだと感じました。

高田 普通救命講習を取り入れた大きな理由の一つに、医療・看護を学ぶものとしての倫理観や責任観の育成につながることを

期待しました。人が道で倒れているを発見したような状況で、そこに積極的に入れないのは確かな技術がないことが1つの要因である、ということを読みました。今回の普通救命講習は3時間近くあるので、使えるレベルの技術を習得し、その技術を持っていることの証しとして認定証を得られることは、学生が期せずして人々の急変場面に出遭ったときに一步を踏み出す力になるのではないかと、思っています。

渡部 これまでお話を伺った範囲だと、看護学科では先ほどの演習にせよ、普通救命講習にせよ、複数の先生が関わっています。チームで教えるというようなことが徹底されているのですか。

一同 そうです。

渡部 ちょっと意地悪な質問ですが、多くの教員が関わると、かえって学生にとって難しいことにならないのですか。

大井 テーマが決まっていれば、そこに向かって集中していきますね。先生方の価値観もそれぞれなので、テーマが不明確だとまとまりづらくなる。その単元を持っている先生がここを目指すということがクリアになっていることが大事になります。

高田 今回、私が科目全体の責任者として先生方へお願いしたのは、「リアリティーを持って学ばせたい」ということです。看護には患者さんという対象がいるので、単に知識を詰め込むという学習ではなく、自分に関わる患者さんをイメージしながら学ぶことがとても大事だと捉えています。看護の対象者がイメージできるように、トリアージの演習を取り入れたり、普通救命講習でも倒れている人を想定した講習を実施したり、各単元に事例をいれるなどして展開しました。

渡部 目的も明確になっていて、やり方も統一感があって、リアリティーを持った授業へ向け、先生方が協力して臨んだということですね。一緒に授業をされるときに、その単元の担当以外の先生方はどんなサポートをするのでしょうか。

大井 授業は担当の先生が行っています。ただ、自分の授業とその前にある授業には、教える内容に繋がりががあります。私の授業が例えば高田先生の災害看護の授業の次であるとすれば、高田先生が教えたこの部分は、私が今行っていることと繋がるんですよ、というように。学生はすべての授業を聞いているので、他の授業との関連性は意識して伝えるようにしています。

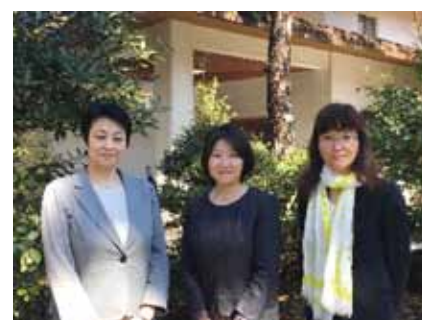
山本 私の授業の前に、高田先生がクリティカル期や急性期などについての概論を教えているので、それを受ける形で授業をしています。「高田先生の授業でこんな話があったよね」といったように、引用はどんどんします。そういう形で前の授業内容を取り入れながら、授業時間も限られているので、自分は各論として何を話していくのかを選んで授業を組み立てています。

渡部 学内ではカリキュラムマップが作られています。積み重ねの教育の大切さが示されているもので、この科目があって、この科目もあるという連続性が、学科のカリキュラムとしてあるということ。お話を聞いていると、看護学科ではそういうことを普通にやられているんですね。

山本 「成人看護論2A」であれば、全体のカリキュラムマップの中のどこに行き着くかを思い描きます。自分の授業の関連科目をピックアップし、この授業が終わったら次はこの授業に進むというイメージをつかんでおくのです。3年生で学ぶ「成人看護論2B」に、2年生で学ぶ「成人看護論2A」がつながることも考慮しています。

高田 レクチャー形式の授業は、どうしても知識を教えることに偏りがちになります。看護では知識も技術も態度も一体となって体现されます。私たちの科目では、患者さんの身体だけでなく、心理・社会面をとらえた全人的な支援を行うために、必要な知識と技術と態度をどのように育成するのが効果的かをこれからも考えていきたいと思っています。学生の学びが積み上がっていくように、授業間のつながり、さらには科目間のつながりが大切になってくるのだと思います。看護学科では、当然科目間の体系性が常に意識され、実践されています。

渡部 本日は色々とお話をいただき、ありがとうございました。



〔左から大井先生、高田先生、山本先生〕

学科FD活動

文学部 日本文学文化学科	
日時	平成 29 年 7 月 10 日 (月) 16:20 ~ 17:30
講師	天津外国語大学 劉 澤軍 准教授
テーマ	天津外国語大学における日本語教育
目的	中国の大学における日本語教育の現状を知り、本学における今後の留学生教育について考える。
日時	平成 29 年 7 月 10 日 (月) 17:30 ~ 18:30
講師	日本文学文化学科 三田 誠広 教授
テーマ	著作権の基礎知識と教育目的指導
目的	著作権について学び、今後の研究教育に役立てる。
日時	平成 30 年 2 月 19 日 (月) 13:30 ~ 14:30
講師	日本文学文化学科 土屋 忍 教授
テーマ	「文学散歩」の再検討—研究・教育・学会からの提言—
目的	学科教員の最近の研究成果報告を聞き、今後の研究教育に役立てる。
日時	平成 30 年 2 月 19 日 (月) 14:30 ~ 15:30
講師	日本文学文化学科 杉崎 夏夫 教授
テーマ	鶴屋南北と河竹黙阿弥の歌舞伎脚本の音便について
目的	学科教員の最近の研究成果報告を聞き、今後の研究教育に役立てる。
グローバル学部 グローバルコミュニケーション学科	
日時	平成 30 年 3 月 22 日 (木) 13:00 ~ 15:00
講師	グローバルコミュニケーション学科 古家 聡 教授
講師	グローバルコミュニケーション学科 小塚 高志 講師
テーマ	英語関連科目の指導法について考える
目的	英語教育の視点から、教授者と学生との信頼関係をもとにした効果的な授業について、教員相互の共通理解を深める。
日時	平成 30 年 3 月 30 日 (金) 10:00 ~ 12:00
講師	グローバルコミュニケーション学科 Anne Ihata 教授
テーマ	Practical Communication の指導法について考える
目的	カリキュラムの内容、評価、指導法などについて、教員相互の共通理解を深める。
日時	平成 30 年 3 月 12 日 (月)、13 日 (火) 13:00 ~ 15:00
講師	グローバルコミュニケーション学科 古家 聡 教授 グローバルコミュニケーション学科 小塚 高志 講師
テーマ	全員留学への取り組み
目的	グローバルコミュニケーション学科における全員留学の目的、意義などを確認し、このプロジェクトに対する周到な準備を行う。
グローバル学部 日本語コミュニケーション学科	
日時	平成 29 年 4 月 6 日 (木) 15:30 ~ 17:30
講師	日本語コミュニケーション学科専任教員
テーマ	日本語コミュニケーション学科における 2017 年度教育目標と課題
目的	非常勤講師を交え、1 年間の教育上の課題をあげ、検討する。
日時	平成 29 年 12 月 19 日 (火) 18:00 ~ 20:00
テーマ	日本語コミュニケーション学科における 2017 年度の振り返り
目的	非常勤講師を交え、1 年間の教育上の課題を振り返り、検討する。
日時	平成 30 年 1 月 10 日 (水) 16:20 ~ 18:00
テーマ	授業評価アンケート・データを踏まえた学科 FD
目的	授業に対する課題の可視化、共有、改善策共有、教育の質的向上を図る。
日時	平成 30 年 2 月 8 日 (木) 10:00 ~ 12:00
講師	日本語コミュニケーション学科専任教員

テーマ	グローバルスタディ研究所発行の紀要に求められるもの
目的	非常勤講師を交え、この分野の研究についての意見交換、並びに論文執筆の注意点について。
日時	平成 30 年 2 月 8 日 (木) 13:00 ~ 15:00
講師	日本語コミュニケーション学科専任教員
テーマ	日本語コミュニケーション学科における 2018 年度の教育について
目的	非常勤講師を交え、DP, CP, AP を中心に 2018 年度の教育方針の共有。
グローバル学部 グローバルビジネス学科	
日時	平成 29 年 10 月 27 日 (金) 11:45 ~ 12:45、 平成 29 年 11 月 2 日 (木) 12:25 ~ 13:25
講師	グローバルビジネス学科 David A. Tedone 教授
テーマ	グローバルビジネス学科学生質問紙結果レビュー
目的	グローバルビジネス学科における学生アンケートの結果を非常勤講師を含む担当教員で共有し、具体的なアクティブラーニングの手法をワークショップ形式で検討する。
日時	平成 29 年 12 月 1 日 (金) 11:30 ~ 13:00、 平成 29 年 12 月 7 日 (木) 12:10 ~ 13:00
講師	グローバルビジネス学科 David A. Tedone 教授
テーマ	グローバルビジネス学科における評価のレビュー
目的	グローバルビジネス学科における成績評価の結果をコーディネーターと非常勤講師を含む担当教員で共有し、具体的な評価基準と評価方法についてワークショップ形式で検討を行う。
日時	平成 30 年 1 月 10 日 (水) 13:30 ~ 14:30
講師	グローバルビジネス学科 榎 殿武 教授
テーマ	グローバルビジネス学科授業評価アンケート結果の考察
目的	グローバルビジネス学科の授業評価アンケート結果をワークショップ形式で検討し、教員・学生とのコミュニケーション方策について検討を行う。
法学部 法律学科	
日時	平成 30 年 2 月 1 日 (木) 14:40 ~ 16:10
講師	法律学科 池田 眞朗 教授
講師	法律学科 古谷 英恵 准教授
テーマ	法律学科ゼミにおけるアクティブラーニングの一例 ①入会権についての実地調査 ②高大連携 武蔵野・千代田 DJ プロジェクト - 騙されない賢い消費者になるために - (政治学科との合同開催)
目的	法律学科学生によるアクティブラーニングの実例を報告し、「法律」を通してのアクティブラーニングの可能性を検討する。アクティブラーニングの実効性を高めるため、「準備・実践・検証」のモデル形成の必要性を確認する。
法学部 政治学科	
日時	平成 29 年 11 月 2 日 (木) 16:30 ~ 18:00
講師	政治学科 深谷 健 准教授
講師	政治学科 三村 憲弘 准教授
テーマ	政治学の多様なアプローチから学科教育を考える (法律学科と共催)
目的	6 月に千代田女学園高等学校にて実施した「選挙特殊研究」履修者による大学生出張講義の紹介などをおこない、高大接続のあり方等について考察を深める。
日時	平成 30 年 1 月 18 日 (木) 18:00 ~ 19:00
講師	政治学科教員
テーマ	平成 29 年度 1・2 学期授業評価アンケートを踏まえた学科 FD
目的	授業評価アンケートの総括を通じて、学科教員が課題を共有し、改善策を可視化する。

経済学部 経済学科	
日 時	平成 29 年 12 月 13 日 (水) 11:00 ~ 14:30
講 師	日本政策投資銀行 中村 純一 氏
テーマ	1. 日本政策投資銀行について説明を受け、現在の日本の経済状況についての討論 2. 来年度より開講される「金融システム論」のカリキュラムにおけるあり方や講義の進め方について議論
目 的	金融の最前線から見た現在の日本経済の現状を説明していただき。合わせて来年度から開設される「金融システム論」の講義の進め方等についての検討を行う。

経済学部 経営学科	
日 時	平成 29 年 1 月 18 日 (木) 12:15 ~ 13:00
テーマ	新マスカットにおける機能と授業活用法
目 的	平成 29 年度に導入された新マスカットと打電による出席管理等について、その活用法を参加メンバーの共有情報とするため、フリーディスカッションを行った。

人間科学部 人間科学科	
日 時	平成 29 年 12 月 22 日 (金) 18:00 ~ 18:30
講 師	人間科学科 小西 啓史 教授
テーマ	3 ポリシーの策定について-武蔵野大学の事例
目 的	3 ポリシー策定の義務付けの経緯、及び授業評価アンケートによる学生の学修成果の可視化、またそれに伴う教育改革と改善策についての説明と問題提起を検討する。
日 時	平成 30 年 1 月 17 日 (水) 19:00 ~ 21:00
講 師	埼玉メディカルセンター主任心理療法士 花村 温子 氏
テーマ	臨床心理士と公認心理師の学外実習について
目 的	公認心理師制度実施計画に基づく、学部生、大学院生への対応などについての考察。
日 時	平成 30 年 1 月 26 日 (金) 17:35 ~ 18:00
講 師	人間科学科 小西 啓史 教授
講 師	人間科学科 泉 明宏 准教授
テーマ	授業評価アンケート結果から見える人間科学科の課題について
目 的	授業評価アンケート結果と授業改善ポイントに基づき、課題についての改善策を検討する。

人間科学部 社会福祉学科	
日 時	平成 29 年 6 月 9 日 (金) / 8 月 4 日 (金) / 11 月 17 日 (金) 平成 30 年 1 月 26 日 (金) 14:40 ~ 16:10
講 師	社会福祉学科全教員
テーマ	学科教員の教授方法に関する参観と理解促進
目 的	社会福祉特講 1・2・3・4 というオムニバス授業を通して、担当教員の授業を他の教員が参観し、授業方法を相互に理解すると共に、そこから各教員自らが教授方法について省察を行う。
日 時	平成 30 年 1 月 13 日 (土) / 1 月 20 日 (土) 10:30 ~ 12:30
講 師	社会福祉学科全教員
テーマ	武蔵野女子学院高等学校との連携と取り組み
目 的	武蔵野女子学院高等学校の 1 年生に対して武蔵野大学社会福祉学科 3 年生 (社会福祉専門ゼミナール 1) がそれぞれのゼミの専門領域を踏まえ、授業企画実施を行い、高大連携に試行的に取り組むを行った。
日 時	2018 年 1 月 26 日 (金) 17:30 ~ 19:00
講 師	社会福祉学科全教員
テーマ	平成 29 年度 1・2 学期の授業評価に関する FD 研修
目 的	平成 29 年度 1・2 学期授業評価を受けて、その評価について振り返りを行いつつ、特にウィークポイントと考えられるスコアの項目について他の教員からアドバイスを受けるといった学科教員間の SHG を展開した。

日 時	2018 年 2 月 27 日 (火) 9:00 ~ 18:30
講 師	NPO 法人コミュニティ・オーガナイズ・ジャパン
テーマ	1 年基礎ゼミナール・2 年発展ゼミナールにおけるアクティブラーニング推進手法の開発に関する研究
目 的	2 年発展ゼミナールにおいては、ソーシャルアクションプログラムを実施し、アクティブラーニングの推進を行っているが、その手法としてコミュニティ・オーガナイズという手法に着目し、その基本的プロセスや手法をワークショップ形式で学びを深めた。

工学部 環境システム学科	
日 時	平成 30 年 1 月 15 日 (月) 17:30 ~ 18:30
講 師	環境システム学科教員
テーマ	授業評価アンケートに基づく学科 FD
目 的	授業改善のための知見の共有、意見交換。
日 時	平成 30 年 2 月 1 日 (木) 18:00 ~ 19:30
講 師	環境システム学科教員
テーマ	卒業論文の評価および質的向上について
目 的	卒業論文の質的向上のための振り返りと意見交換。

工学部 数理工学科	
日 時	平成 29 年 7 月 3 日 (月) 17:30 ~ 18:30
テーマ	数理工学の実社会での応用を学ぶ
目 的	数理工学科では 3 年次 1 学期に「数理工学概論 2」というオムニバス形式の講義 (全 16 回) を行っている。この講義は学生の出口を意識し実社会で応用されている数理工学の事例について主に企業、研究所で活躍されている外部講師の方々にレクチャーして頂いている。このような数理工学の実社会での応用を学ぶ機会は学生のみならず教員にとってもいい機会であることから学科の全教員が必ず一回は出席し、後日学科教員で集まり学科 FD として「数理工学概論 2」で得た新しい知識・情報などを意見交換する場を設定した。
日 時	平成 30 年 2 月 14 日 (水) 14:30 ~ 15:30
テーマ	数理工学科専任教員の研究・教育に関する相互交流
目 的	「数理工学概論 1」を学科 FD として設定し、各教員がお互いに聞くことで他の教員の研究内容や教育手法などの情報を共有し教員の能力向上を目指している。全教員が必ず一回は出席し、後日学科教員で集まり学科 FD として「数理工学概論 1」で得た新しい知識・情報などを意見交換する場を設定した。

工学部 建築デザイン学科	
日 時	平成 29 年 12 月 12 日 (火) 13:00 ~ 14:30
講 師	建築デザイン学科教員
テーマ	建築デザイン学科完成年度のゼミの在り方
目 的	学科改組後、次年度初めての 4 年生を迎えるにあたり、卒業研究の運営方法を見直す。
日 時	平成 30 年 1 月 9 日 (火) 13:00 ~ 14:30
講 師	建築デザイン学科教員
テーマ	授業評価アンケートの結果からみる学科カリキュラムの課題
目 的	アンケート結果に基づく改善施策の検討とともに、学科改組後のカリキュラムの再評価を行う。
日 時	平成 30 年 1 月 23 日 (火) 13:00 ~ 14:30
講 師	建築デザイン学科教員
テーマ	建築デザイン学科完成年度後の学科カリキュラムの見直し
目 的	第 1 回、第 2 回の学科 FD を踏まえて、学科完成年度後のカリキュラムの在り方を考える。

教育学部 児童教育学科	
日 時	平成 30 年 1 月 11 日 (木) 14:30 ~ 16:00
講 師	(相互研修)
テーマ	児童教育学科における授業評価アンケート結果からの授業改善の検討
目 的	児童教育学科の授業評価アンケート結果を概観し、DP 到達目標の学生への周知について、および今後の授業改善についての検討を行った。
日 時	平成 30 年 2 月 8 日 (木) 14:40 ~ 16:20
講 師	(相互研修)
テーマ	新保育士資格課程カリキュラムのねらいと本学こども発達学科カリキュラムの再構築について
目 的	2019 年施行の厚生労働省による新保育士資格課程と同年施行の文部科学省新教職課程に対応した本学こども発達学科カリキュラムマネジメントを行い、時代の要請に即応した教育内容を充実していくために、新課程についての学習会を行い、具体的なカリキュラムの構想を行った。
日 時	平成 30 年 2 月 8 日 (木) 14:40 ~ 16:20
講 師	教職センター事務室 高城 栄則 室長
テーマ	教職課程カリキュラムの構造と教職免許取得および教育実習参加の要件について
目 的	学生の履修指導及び進路指導に不可欠な教職課程と教育インターンシップについて、カリキュラムの構造、免許取得および教育実習参加要件について全教員が理解を深めた。常日頃から学生の主体的な学びの環境を作り、全教員が個々の学生に応じた学修指導、履修指導、進路指導をできるようにするため。
日 時	平成 30 年 3 月 2 日 (金) 14:00 ~ 15:30
講 師	天津外国語大学教員交換派遣教員、短期海外 FS 担当教員 庭野 正和 氏 児童教育学科 上岡 学 教授 (海外 FS 担当) 児童教育学科 初谷 和行 講師 (海外 FS 担当) 児童教育学科 生井 亮司 准教授 (短期海外 FS 担当)
テーマ	海外の教育事情と海外 FS の展開
目 的	海外教員交換派遣 (天津外国語大学での講義)、短期 FS (ロサンゼルス教育研修)、学科 FS (カナダ教育・保育海外研修) の実施結果、海外の教育事情視察 (エストニア) についての報告をもとに、今後の海外研修やアクティブラーニング及び ICT 教育に関する学修の充実について検討する。
薬学部 薬学科	
日 時	平成 30 年 1 月 16 日 (火) 15:30 ~ 16:35
講 師	薬学科 棚元 憲一 教授
テーマ	平成 29 年度 1・2 学期授業評価アンケートデータを踏まえた授業改善
目 的	・授業評価アンケートデータを参考に、学科内の授業改善に向けての課題共有、改善策を可視化する。 ・授業への学生の主体的参加 (自律的学び、責任感) を促し、学力向上につなげるための課題、ノウハウ、スキル共有の場とする。
日 時	平成 30 年 2 月 13 日 (火) 16:00 ~ 16:45
講 師	薬学科 堅田 利明 教授
テーマ	平成 30 年度以降の学修支援強化に向けた対策
目 的	・志願・入学者数、予備校偏差値、学年進級状況等の年度別データに基づいて薬学科内学年別の学修支援に向けた課題を共有し、対策を可視化する。 ・各学年の成績下位者に対して、8 号館内に薬学教育推進室等を設定し、学修支援強化に向けた実践の場とする。

看護学部 看護学科	
日 時	平成 29 年 7 月 12 日 (水)
テーマ	これからの大学教育・看護学教育の在り方を踏まえた本学科の課題と方向性 ～教育の質の維持向上をめざした効果的・効率的な取り組みに向けて～
目 的	大学教育・看護学教育を取り巻く現状と本学科としての課題と対策に基づき、今日の保健医療体制に応じたこれからの教育展開について検討する。
日 時	平成 30 年 1 月 10 日 (水)
テーマ	看護学科学生の主体的な学習を促す授業運営上の工夫 ～平成 29 年度授業評価アンケート (1・2 学期) の分析結果を踏まえて～
目 的	平成 29 年度 看護学科授業評価アンケート (1・2 学期) 結果の総括と問題提起に基づき、学生の主体的な学習を促す授業運営上の工夫について検討する。
日 時	平成 30 年 2 月 20 日 (火)
講 師	帝京大学 学修・研究支援センター 土持 ゲーリー 法一 教授
テーマ	‘学び方を学ぶ力’を育むアクティブラーニング～学習パラダイムに基づく教授方法～
目 的	アクティブラーニングに関する有識者を招聘し、学生の主体的学びを促進する教育活動に有用な理論と実践に関する講演を通して、教員個々が学習パラダイムに基づく教授方法について新たな発想を得る機会とする。
教養教育部会	
日 時	第 1 回 (平成 29 年 5 月 10 日 (水) 17:00 ~) ~ 第 9 回 (平成 30 年 1 月 17 日 (水) 17:00 ~)
講 師	教養教育部会 小川 桂一郎 教授
テーマ	教養教育部会 教務連絡委員会 ―平成 30 年度以降の武蔵野 BASIS 改革について―
目 的	今後の武蔵野 BASIS をどう改革するかについて各科目群のリーダーとともに検討する。
日 時	平成 30 年 2 月 8 日 (木) 15:30 ~
講 師	グローバル学部 藤浦 五月 准教授
テーマ	今期アンケートの共有・日本語リテラシーの意義確認
目 的	新規の先生方との顔あわせ、2018 年度 & 2019 年度に向けた業務改善案について意見交換。
日 時	平成 30 年 3 月 5 日 (月) 10:00 ~ 14:00
講 師	教養教育部会 東郷 裕 准教授、間中 和歌枝 准教授
講 師	(株) センゲージラーニング デイヴィット ホワイト 氏
テーマ	平成 29 年度 BASIS 英語教育の総括と平成 30 年度英語教育について
目 的	平成 29 年度 BASIS 英語教育の反省を踏まえて、平成 30 年度の新カリキュラムの概要の説明と、新テキストの特徴と使用方法の解説とデモンストレーションを行う。教員全体で BASIS 英語教育の方向性とテキストの知識を共有する。
日 時	平成 30 年 3 月 5 日 (月) 14:00 ~
講 師	教養教育部会 遠藤 祐介 准教授
テーマ	中国語教育 FD 研修会 ―平成 30 年度中国語の教育方針について―
目 的	平成 29 年度の総括をし、現場において見えてきた問題点を抽出し担当教員間で共有する。その上で参加者が対策を議論し改善方法を探る。

平成 30 年度 FDSD 活動計画

質保証時代に向けた来年度以降の本学FDのありかた

教務部長 北條 英勝

本学では、全学 FD 研修会が毎年複数回実施されるなど、この 10 年間で FD という言葉は学内に深く定着しています。しかし、教育の質保証をより実質化し、成果をあげていくためには、全学の FD 研修会に加え、学科や教科グループによる

主体的かつ計画的な FD 活動が不可欠です。今後は、全学と学科・教科グループでの FD 活動とを有機的に関連づけ体系化することで、より成果をあげられる質保証体制を整備して参ります。

【1】平成 30 年度 FD 基本方針

本学の FD は全て教育改善に繋がるものであり、ベーシックな知識習得型の学びと、アクティブラーニング等に代表される能動

的な学びによる成果を、可視化するための活動です。具体的には、以下 4 つの基本方針のもと、各学部・学科のニーズをくみ取り実質的な活動を進めていきます。

《基本方針》

- ① 外部環境の諸変化を踏まえ、FD に取り組む必要性を明確にし、全学の参画意識を高める
- ② 全学、目的別、学科レベルで再定義した FD 活動の実効化を図る
(例) 学科における FD 推進の機能化 (担当委員、学科長の役割を明確化)
授業改善小委員会の活動強化
学外に開かれた FD シンポジウム企画、学生による教育座談会等、新たな取組みの検討
- ③ 学科 DP & 授業評価と、FD 活動との連関を具体化する (IR 的機能を強化する)
- ④ 学科主導による「FD ワークショップ※」等の開催
課題意識の共有、体系的な高等教育の方法論などの実践的なスキル、知識の修得、情報共有を図る

※計画中

【2】FD の機能と今後促進を目指す活動内容

平成 29 年度は、「社会の変化と大学教育の課題」「地学・教職・学職一体の大学改革 ～誰のため / 何のための大学かを覚悟すること」「教育の質保証時代：FD と学修成果」さらに「本学における FD 活動 事例報告」等、年 4 回の全学 FD 研修を開催しました。

平成 29 年度のテーマは、「求められる質保証時代に際し、本学を取り巻く環境変化と先行的な事例から、本学の FD のあり方を再整理する」ことを念頭においたものでした。本学独自の FD を推進するためにも、高等教育における環境変化の理解に加え、外部環境変化を踏まえた教育改革先行事例から、大学教育の在り方を学生ファーストに置いた全学改革の事例を共有。さらに認証評価受審年を控え、大学に求められる質保証や評価の実相と、

学修成果の在り方をテーマに展開してきました。

平成 30 年度は、今までの FD 推進の課題を踏まえ、講演中心の全学 FD に留まらず、柔軟に FD 参加の対象者を換える目的別 FD 活動、さらに学科または教科グループで行われる FD 活動を推進したいと考えています。

平成 29 年度末に全学で実施した FD アンケートなどをもとに、30 年度は FD 活動を改めて 3 つの活動 (全学、目的別、学科) レベルに分け、手順と目的、ゴールを差異化しながら、より「実践知」を修得できる本学の FD の精緻化、体系化を進めていきます。

今後、学内の多くの教員発のアイデアを蓄積し、全学として中期的な教育の活性化、質保証に繋げるべく、時宜にかなう FD 推進を図ります。

《FD 活動の体系化》

分 類	機 能	平成 30 年度以降に求められる FD 内容	
全学 FD 年間 3 回	◆ 全学課題の共有と理解 ◆ 学長方針把握と実効化・具体化 ◆ 教育課題の先端情報の理解と対処	◇ 全学の教育重点実行項目の把握と実効化 ◇ 教育制度の理解 (学校教育法、大学設置基準、学則、履修規則、4 学期制度) ◇ 外部環境理解 (文科省施策・社会環境変化・受験生や保護者、高校等ステークホルダーのニーズ把握など) ◇ ダイバーシティへの対応 (障害学生の受入れ等 顕在化した諸問題対処)	◇ 優秀 (GP) 学科および教育優秀者の表彰 ◇ 研究者、教員倫理規程と社会的責任の周知
目的別 FD 年間 4 回	◆ 全学教学マネジメントの向上 ◆ 学科長のマネジメント力 ◆ 各業務における委員の知識&実践的ノウハウの修得	◇ カリキュラム開発&カリキュラムアセスメント推進 ◇ 学習支援 (履修指導) システムの開発 ◇ 自己点検・評価活動とその活用 ◇ 認証評価制度の理解と実践 ◇ 危機管理法	◇ 組織マネジメント法 ◇ 学生参加型 FD ◇ DP および出口目標へのマネジメント ◇ FD から IR への検証法の質的転換の推進
学科・教科グループ FD 各学科 3 回以上	◆ 教育方法の質的理解と実践知の獲得 (ワークショップの推進)	◇ 大学の理念・目標を理解するワークショップ ◇ 高年次教員による新任教員への指導 ◇ 教員の教育技法改善の支援活動 ◇ 学習理論、討論法、PBL、AL、評価法、ICT 活用、メディア・リテラシーの習熟等 ◇ アセスメント (授業評価、教員相互の教授法評価、教員の諸活動の定期的評価)	◇ シラバス作成研修、相互評価 ◇ アカデミックプレゼンテーション能力 ◇ チームビルディング論と実践 ◇ 学外学修(AL)プログラム設計と実践

世界の幸せをカタチにする。

Creating Peace & Happiness for the World



Musashino University

武蔵野大学 2017FDレポート第3号

発行：FD委員会

発行日：平成30年3月26日

事務局：武蔵野大学 教育改革推進室

〒135-8181 東京都江東区有明3-3-3

TEL 03-5530-7729 FAX 03-5530-3812

e-mail kaikaku@musashino-u.ac.jp

URL <http://www.musashino-u.ac.jp/>